教会生活入門のてびき

聖書が教えている教会生活

●日本同盟基督教団教会教育部●

「聖書が教えている教会生活」正誤表

※第2刷(2004年8月1日発行)、第3刷(2007年7月1日発行)、4刷(2011年7月1日発行)、5刷(2014年4月1日発行)の正誤表です。

課	頁	行	誤	正
この本の使い方		3	と言って、彼らに勧めた。	と言って彼らに勧めた。
		21-23	「教会員の手引き」に詳しい解説がありますので、「教会員の手引き」	「聖書が教えている家庭生活・社会生活」
目次		16	[洗礼の誓約]	[洗礼式の誓約]
第1課	2	1	神の目に見えない本性	神の、目に見えない本性
		2	この方	このかた
	4	16-17	人間は被告席にあります	人間は被告席にいます
		下6	罪赦された	罪が赦された
	5	11	律法の全体を	律法全体を
		下8	隣人のものを	隣人の家を
	6	7	啓示されました。	示されました。
		9	信じるすべての人に	すべての信じる人に
		14	(ローマ3:23-25a)	(ローマ3:21-25a)
	7	7	イエス・キリスト様を	イエス・キリストを
		10	「人には一度死ぬことと	「人間には、一度死ぬことと
		10	定まって」いますが、	定まって」(ヘブル10:27)いますが、
		17	いるからです	いるからです。
第2課	10	下7	エペソ1:13	エペソ1:13-14
	11	15	コロサイ2:19	コロサイ3:10
	12	6	「もし罪は	「もし、罪は
		9	(1ヨハネ1:8、9)	(Ⅰヨハネ1:8、9)
		20	よって、アバ、父と	よって、「アバ、父」と
		23	苦難を共に	苦難をともに
	13	1	(ローマ8:14－16)	(ローマ8:14－17)
	14	5	神はすべてのことを	神がすべてのことを
		6	ることを私たちは	ることを、私たちは
		6	神はあらかじめ	神は、あらかじめ
		8	多くの兄弟の中で	多くの兄弟たちの中で
	15	下4	今ある者も、後に来る者も	今あるものも、後に来るものも
		下1	(ローマ8:39)	(ローマ8:38－39)
第3課	18	8	またヘブル11:38には、	また使徒11:38には、

「星暮の巻」えでいる教会生活」正誤表

※第2版(2004年8月1日発行)、第3版(2007年7月1日発行)、4版(2011年7月1日発行)、5版(2014年4月1日発行)の正誤表です。

頁	行	誤	正
巻頭カラー	2	ゴ語ってゴ「並ぶ」の上ゴ	ご言ってご神の上に動かた。
	21–22	日曜学校生の子自分に聞かし、「聖書の教えとしるの基礎を点・注意	聖書の教えとしるの基礎を点・注意
	23	聖の年生活	
目次	10	聖礼の実践	洗礼式の実践
	2	神の目に義人とは本性	神の目に義人の本性
		「ルーター」	ルターの人生
	4–10	「アル」人間は罪の原」を生き	人間は神造物主に人生
		「自己」解放された	解放された人
	5	「」は法の全体を	律法は全体を
		「」は人の生き方	隣人愛生き方
第1部	6	「」神を知れ	神を知れ
		「」の人に	「」の人に
		「」(ローマ12:25-26)	(ローマ12:21-26)
	7	「」エス、「」の人間	「」エス、「」の人間
		「」人間は一体	「」人間は一体
	10	「」安全ロ「」キ「」	「」まず「」(ヘブ12:10-21)は「」キ
			「」の
	11	「」ゆるから「」	「」ゆるから「」
	10	「」ヘブ12:13	「」ヘブ12:13-14
	11	「」ロマ(2:16	「」ロマ(2:10
	12	「」は「」聖は	「」は「」聖は
		「」(ヨハネ1:3)	「」(ヨハネ1:3)
		「」エ「」ア「」ス	「」エ「」ア「」ス
		「」聖書を「」に	「」聖書を「」に
第2部	13	「」(ロ一マ8:1-10)	(ロ一マ8:1-17)
	14	「」神は全ての「」	「」神は全ての「」
		「」の「」を「」は	「」の「」を「」は
		「」神は「」	「」神は「」
		「」聖(の)「」	「」聖(の)「」の中で
	17	「」ウ「」の「」聖に	「」の「」の「」聖に
		「」(ロ一マ5:20)	(ロ一マ5:20-30)
第3部	14	「」ヘブ(1:3)に	「」聖書(イ)に

第3課	18	13	″神が自分の血をもって買い取られた教会″	″神がご自分の血をもって買い取られた神の教会″
		下8	神の民でなかったのに	神の民ではなかったのに
	19	18	キリストを教会	キリストを、教会
		19	キリストの体であり	キリストのからだであり
	20	下2	(使徒2:46)。	(使徒2:42)。
	21	3	マタイ28:19-20	マタイ28:18-20
		3	マルコ16:15-20	マルコ16:15-18
	21	17-18	大人	おとな
		下2	(コリント11:8-9)。	(Ⅰコリント1:8-9)。
第4課	25	下4	(マタイ3:13-16)	(マタイ3:13-17)
第6課	48	13	馬車を留め	馬車を止め
	56	8	多様性が	多様性は
第7課	59	14	ました。聖徒たちを	ました。(中略)それは、聖徒たちを
	60	下2	私は神のあわれみ	私は、神のあわれみ
	61	15	人に対して行うことではなく	人に対して行うものではなく
	63	7	(4)特別指定献金	(4)**特別指定献金**(太字)
第9課	82	5	行ってふたり	行って、ふたり
確認クイズの答え	97	5	御心	みこころ
	99	5	応答します	応答します。
	101	8	知らせてくこと	知らせておくこと

聖書が教えている教会生活

― 教会生活入門のてびき ―

日本同盟基督教団教会教育部

「聖書が教えている教会生活」の発刊にあたり

日本同盟基督教団
理事長　赤江　弘之

私たちは「日本とアジアと世界に仕える日本同盟基督教団」という表題をかかげている、正統的なプロテスタント教会です。このたび教育部からこのシリーズが発刊されたことをこの上もなく喜び、心から感謝いたします。

洗礼(バプテスマ)の準備をすることは大切なことです。シリーズ１の「聖書が教えている基本的なこと」を学んだ方でも洗礼の決断が出来ていない場合があります。その場合、このテキストで学んだ上で、よく祈り、洗礼の決断をされることをお勧めします。

多くの方が、この学びの中で、信仰の確信に至り、教会の存在の意味や、教会生活の実際を知るにつれ、きっと洗礼を受けたくなると思います。

洗礼を受け、正式にクリスチャンとなられる方には、次の二つのことだけをお願いします。第一は、お客様信者にならないで、神の家族として使命を持って教会に加わること。第二は、個人的信仰が確立すると同時に、キリストのからだとしての教会に、共同体意識を強く持つことです。つまり、自分自身が教会であり、教会のことは自分のことと思える信仰です。それが、「主の弟子」となることです。

そして、主にあって同じ教団の諸教会と、すべての信徒と共に、21世紀の日本とアジアと世界に仕える仲間となって下さることを祈っています。

2000年11月

この本の使い方

「ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、『この曲がった時代から救われなさい。』と言って、彼らに勧めた。そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。」(使徒2:40、41)

神は、イエス様を救い主として信じて、新しく生まれたばかりの赤ちゃんクリスチャンを、ひとりぼっちでこの世に放り出されませんでした。赤ちゃんクリスチャンが安心して育ち、イエス様の弟子として神の栄光を現わしていくことができるように、「教会」を用意してくださいました。ですから、クリスチャンの信仰生活は、「教会生活」と言い換えることができます。

この本は、「聖書が教えている教会生活」というタイトルのように、イエス様を信じたばかりのクリスチャンが、これから始まる教会生活を、できるだけ分かりやすく、きちんと聖書から学ぶことができるように願って出版されました。特に、クリスチャンとして、教会生活の大切な出発点になる「洗礼(バプテスマ)」を受けるための準備にポイントを置いています。私たちの日本同盟基督教団の洗礼(バプテスマ)式の式文を土台にして、内容を編集しました。教会の洗礼準備会のテキストとして、また教会生活の学びに用いていただければ幸いです。

なお、この本では、クリスチャンの家庭生活や社会生活について、あまり多くふれませんでした。日本同盟基督教団が発行している「教会員の手引き」に詳しい解説がありますので、「教会員の手引き」をともにお使いくだされば幸いです。また、キリストの救いについての基本的な教えは、この本の前編になる「聖書が教えている基本的なこと」で解説していますので、その本をお用いくださるようお勧めします。

この本が、皆さんのクリスチャンとしての成長と、諸教会の成長に役立つことを心からお祈りしております。

目　次

すいせんのことば

この本の使い方

第１課　救いの確信と成長（その１）……1
［１］罪について……1
［２］義認の祝福……4

第２課　救いの確信と成長（その２）……9
［１］聖化の祝福……9
［２］神の子とされた祝福……12
［３］救いの計画……14

第３課　教会……17
［１］教会とは何ですか？……17
［２］教会の使命（働き）……20

第４課　洗礼(バプテスマ)について……24
［１］洗礼(バプテスマ)の意味……24
［２］洗礼の誓約……29

第５課　神との交わり……33
［１］神との交わりの大切さ……34
［２］神との交わりの祝福……36
［３］神との交わりの持ち方……38

第６課　礼拝を目的とする人生……46
［１］日曜日は主の日……46
［２］礼拝の実際……50
［３］礼拝の心得……54
［４］まとめ―礼拝出席を実行しよう！―……57

第７課　教会員の務め …… 59
［１］教会員の務めとは …… 59
［２］教会の経済を支える奉仕 …… 60
［３］教会の活動を支える奉仕 …… 63

第８課　あかしの生活 …… 66
［１］伝道 …… 67
［２］この世で生きる …… 71
［３］他宗教とのかかわり …… 74

第９課　教会の純潔と一致 …… 79
［１］教会の純潔 …… 80
［２］教会の一致 …… 83

第10課　洗礼(バプテスマ)に備えよう …… 87
［１］洗礼を受ける時期と手続き …… 87
［２］洗礼式での救いのあかしの備え …… 89

確認クイズの答え …… 96

日本同盟基督教団信仰告白 …… 103

あとがき …… 105

第1課 救いの確信と成長(その1)

ある人がこんな話をしてくれました。「かつて私は、洗礼を受けるにはもう少し立派なクリスチャンらしくなってから、と思っていました。けれども、そんなことを言っていたら、一生、洗礼は受けられないのではないか、と不安になりました。まず、イエス様を救い主として受け入れたのだから、洗礼を受けて、そこから成長していこう。そう思った時、不安がなくなりました。」

私たちはここで、信仰生活の土台となる救いの確信、そしてキリスト者としての成長について、おおむねローマ書1章から8章の順序にしたがって学びたいと思います。

●この課で学ぶ内容●

［1］罪について

［2］義認の祝福

［1］罪について

◆ポイント◆

キリストにある救いとは、罪とその罰としての死からの解放です。

ですから、まず罪について学びましょう。

ローマ書1章18節から3章18節までは、人間の罪について記されています。

1．まことの神を礼拝しないこと

「神の目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこの方、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。」　（ローマ1:20－21）

罪の根本は、まことの神に無関心あるいは反抗的で、礼拝せず感謝もしないことです。

「神などに頼ることは弱い人間のすることだ。」などと言う人たちがいます。けれども、まことの神は万物の創造主であり、私たちの必要のすべてを満たしていてくださるお方ですから、実際には、神なしで一分一秒でも生きられる人はいません。

創造主なる神に背を向け自力で生きられると思っているのは、愚かなことです。神に背を向けることこそが罪の根本です。

2．偶像礼拝

「彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」　（ローマ1:22－23）

本来、「真の知識」と「聖（宗教性）」と「義（道徳性）」において人間は神のかたちに造られたのですが、創造主である神を見失った結果、まことの神に関する「真の知識」を失いました。

そして、自分の欲望にあわせて、人間や死者の霊や動物の像を作って、これを拝むようになって、その「宗教性」において堕落したのです。

被造物を神の代用としておがむこと、これを偶像礼拝といいます。

3．もろもろの罪

まことの神に背を向けた人間は、いろいろな罪を犯すようになりました。

つまり、その「道徳性」においても堕落したのです。罪のリストを見てみましょう。

・「性的倒錯」（ローマ1:26－27）

・「日常生活における罪」（ローマ1:29－31）

むさぼり、悪意、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪だくみ、陰口など。

4．偽善という罪

「ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。」（ローマ2:1）

私たちは、他人の罪はよく見えて、これを非難するのですが、自分の罪は見えないことが多いのです。

そして、神が「あなたは罪がある」とおっしゃるのに反抗して、「私は正しい」と主張し、自分の罪を認めようとしないで偽善という罪に陥るのです。

こういうわけで聖書は言います。「すべての人が罪の下にある」「義人はいない。ひとりもいない。」（ローマ3:9－10）

さて、あなたは罪に関する聖書の言葉を読んで、自分自身も今まで神の御前に罪を犯してきた罪人であるということを認めますか。

［2］義認の祝福（ローマ3:19－5:21）

◆ ポイント ◆

神がこの世においてキリスト者に下さるおもな祝福は、「義認」と「聖化」と「神の子とすること」です。

神がこの世においてキリスト者にくださるおもな祝福は、「義認」と「聖化」と「神の子とすること」です。

ここでは第一に、義認の祝福を学びましょう。

1．義と認める主体は神

「義」とは、人が神の要求される基準にかなった正しい状態にあることを意味します。人は神と正しい関係にあってこそ、つまり義であってこそ、良心の責めから解放されて心に平安を持ち、神から生きる力を与えられ、さらには死後のさばきをも恐れることなく生活することができます。

「義と認める」とは法廷用語で、さばき主である神が、被告について神の基準にかなった正しい者だと宣告することを意味します。

このように義認の主体は神であって、人間ではありません。人間は被告席にあります。ですから、人が「自分は正しい」と思おうと、「自分は罪がある」と感じようと、それは裁きには関係ないことです。

神の法廷で人を義と認めるのは、神のなさることだからです。神に義と認められ、罪赦されたということはこのように客観的なことなのです。

私たちは、自分の救いの根拠を変わりやすい自分の感情に置いてはいけません。私たちの救いの根拠は、神がキリストを信じる者を義と認めてくださるという、揺るがない約束にあるのです。

「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。」（ローマ8:33）

2．義は神からの贈り物—キリストの贖罪（しょくざい）—

「なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」（ローマ3:20）

罪のある人間は、どのようにすれば神の前に義と認められることができるでしょうか。

多くの人は、自力で律法を行ない功徳を積んで神の前に義と認められるようになろうとします。善行を積み上げれば、天国に入ることができるかのように思い込んでいるのです。これを律法主義といいます。

ところが、現実には、律法主義による救いは不可能です。誰一人として神の律法を完璧に守ることができる人はいないからです。「律法の全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した」ことになるのです（ヤコブ2:10）。

律法を本気で行なおうとすれば、人は自分に罪があることを自覚するようになります。

使徒パウロはたいへんきまじめな人でした。ユダヤ人の家庭に生まれた彼は偶像礼拝などもちろんしたことはありませんし、安息日は一度も破ったことはありません。父母を敬いました。また、殺人や姦淫や盗みなどの罪を犯したこともありませんでした。

けれども、そのパウロが十戒の第十番目の戒めを本気で行なおうとしたときに、自分は罪深い者だなあと認めないではいられなくなったと言っています。

第十の戒めとは「あなたの隣人のものを欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」です。（出エジプト20:17）

パウロは人の妻を見るたびに心のなかで「欲しがってはいけない」とつぶやき、人の財産や出世を見るたび「欲しがってはいけない」とつぶやきます。しかし、いくら努力しても、自分の心のなかに不当な欲望やねたみが湧き上がってくるのをどうしても抑えられないことに気づいたのでした。律法によってかえって罪の意識が生じたのでした（ローマ

7:7－13)。

それでは、自力では神の律法の基準にかなう者となることのできない人間は、どのようにしたら、神から義と認めていただけるでしょう。

それは、神がくださった贈り物であるキリストの義を感謝して受け取ることです。これこそ神が用意された方法です。

「しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者（つまり旧約聖書）によってあかしされて、神の義が啓示されました。すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それは信じるすべての人に与えられ、何の差別もありません。すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神はキリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。」　（ローマ3:23－25a）

3．信仰によって受け取る（ローマ4:1－25）

神が用意してくださったキリストの義という贈り物を、私たちは何によって受け取ることができるでしょうか。行ないによってではなく、信仰によって受け取るのです。

贈り物をもらうときに、「代金を払います。」とは言わないでしょう。そうしたら贈り物が贈り物でなくなってしまいます。

「ありがとうございます。」と相手の好意を信頼し感謝して受け取るでしょう。

私たちが、神が用意してくださった、キリスト・イエスによる罪の贖いという贈り物を受け取ろうとするとき、自分の行ないと引き替えに買い取ろうとするならば、恵みが恵みでなくなってしまいます。

神からのキリストによる救いを受け取るためには、神のご好意を信頼し感謝して受け取る以外に方法はありません。神の前で、自分中心の生き方が罪であったことを認めて方向転換し、御子イエス様の十字架の死と復活が、自分の罪の贖いのためになされたことを信じることです。

「何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。」(ローマ4:5)

「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」(ローマ4:25)

4．最後の審判も安心（ローマ5:1－11）

イエス・キリスト様を自分の罪からの救い主と信じて受け入れた瞬間、あなたはキリストの義を受け取り、神の御前に義と宣告され、神との平和のなかに入れられました。

「人には一度死ぬことと、死後にさばきを受けることが定まって」いますが、キリスト者は最後の審判における神の怒りを恐れる必要がありません。

神からの贈り物であるイエス・キリストの義を信仰によって受け取った人は、最後の審判においても罪に定められることはありえないからです。すでに、キリストの死によって、キリスト者は神との和解を受けているからです

私たちは、死をも最後の審判をも希望をもって迎えることができます。

❶ 確認クイズ ❶

Q１．罪の根本とは何ですか。あなたは神の前で自分が罪人であることを認めますか。[1]-1

Q２．神がキリスト・イエスにあって私たちにくださる祝福を三つ述べてください。

Q３．あなたがイエス・キリストの義を受け取る方法は何ですか。[2]-3

Q４．あなたがイエス・キリストを救い主として信じたとき、あなたを義と認めるのは、誰ですか？[2]-1

Q５．キリストを信じたとき、私は（　　）という主人に対して死んだので、（　　）から解放され、義の奴隷となりました。

Q６．この課で教えられたこと、心に残ったことは何ですか？

※問題の後ろの数字は、この課の項目を表わしています。（例）[2]-3は、[２]の項目の３.のことです。
各項目を読み直して、質問に答えてください。

第2課 救いの確信と成長(その2)

神がこの世にあるクリスチャンにくださる主な祝福は、第一に義認、第二に聖化、第三に神の子とされることです。私たちは主イエスを信じた時、罪の性質があるままで神から罪を赦されました。これが義認です。次に、私たちは罪の性質から解放されキリストに似たものへと変えられていきます。これが聖化です。そして、このクリスチャン生活には、神の子どもとしていただいたという喜ばしい確信と御国の相続という希望がともなっているのです。

●この課で学ぶ内容●

［1］聖化の祝福
［2］神の子とされた祝福
［3］救いの計画

［1］聖化の祝福

◆ ポイント ◆

キリスト者の成長には「一回的な面」と、「継続的・漸進的（ぜんしんてき）な面」とがあります。

1．聖化―一回的な面―

(1) 罪の支配から解放され、義の奴隷となった（ローマ6:1－23）

一回的な側面とは、まずキリストを信じ受け入れ義とされたとき、キ

リストにつぎ合わされて、罪に対して死んだので罪とサタンの圧制から解放されて、神に対して生き返って神の支配の中に義のしもべとなったということです（ローマ6:1—23）。

キリスト者は、もはや罪という主人の下にはいませんから、罪を犯す必要はありません。かえって、キリスト者はキリストを主としているのですから、キリストに自分の手足をささげて生きるのです。

キリスト者として成長するためには、自分はすでに罪とサタンの支配から解放され、御子の支配の中にあるという自覚がとても大切です。

「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」　（コロサイ1:13）

(2) 律法の奴隷状態から解放され、聖霊によって仕える（ローマ7:1－6）

キリスト者は罪の支配から解放されたばかりでなく、人を罪に定める律法の奴隷状態からも解放されたのです。キリスト者は、キリストにつぎ合わされてキリストとともに死刑になってしまったので、人を罪に定める律法の呪いからも解放されているのです。

では、キリスト者は律法の奴隷状態から解放されたから、神の律法にそむくことをしようということになるでしょうか。

いいえ。キリストを信じた者には、

- 聖霊によって証印が押され、（エペソ1:13）
- 聖霊によって神のみこころが石の板にではなく心の板に記され、（Ⅱコリント3:3）
- 神が喜ばれることを喜び、神が嫌われることを嫌う新しい性質が与えられたので、（Ⅱコリント5:17）
- 奴隷のようにいやいやながらではなく、御霊によって自発的に神に喜んで仕えることができるのです。（ローマ7:6）

2．聖化—漸進的な側面—

(1) キリスト者は漸進的に成長する

赤ん坊が生まれることは一回的ですが、徐々に成長していくように、キリストを信じて義と認められ、聖霊によって新しく生まれたことは瞬間的ですが、キリスト者が成長していくのは漸進的なことです。

果樹が徐々に成長して実を結ぶように、キリスト者はますます「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」といった「御霊の実を結ぶ」ようになります（ガラテヤ5:22、23）。

また、「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」（Ⅱコリント3:18）とも言われます。

また、堕落によって毀損（きそん）した「神のかたち」の回復という観点から、「造り主のかたちに似せられてますます新しくされ」ることとも表現されます（エペソ4:23－24、コロサイ2:19）。

このように、キリストのみもとに引き上げられて完成するまで、私たちは「キリストと同じかたち」に向かって、生涯にわたってますます成長して行きます。

(2) 信者の罪の処理について

その過程で、神からいただいた新しい御霊と古い肉（罪の性質）との葛藤（かっとう）が生じることがあります（ローマ7:7－25、8:5－8）。

この時、キリスト者になって、かえって自分の罪深さを知るようになります。サタンは「お前は罪深い。救われているのか？」と疑いを起こさせようとします。しかし欺かれてはいけません。

池の水がひどく汚れているときには、池の底のゴミが見えないものですが、池の底に泉が開け、池の水が澄んでくると、底のゴミがやたらと目につくようになるでしょう。

そのように、聖霊をいただき聖書のみことばに照らされるときに、自

分の罪が以前よりもはっきりと知らされてくるものです。

池の底のゴミが目についたら、それを取り除けばよいのと同じように、自分の罪が自覚させられたときには、罪を告白し、もう一度「キリスト・イエスにある者が罪に定められる事は決してありません。」（ローマ8:1）という土台に立ち返り、赦しときよめを確信しましょう。

「もし罪はないというなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（1ヨハネ1:8、9）

［2］神の子とされた祝福

◆ ポイント ◆

キリスト者がこの世でいただく第三の祝福は、キリストを信じた時に、一回的に子とする御霊を受けて神の子どもとされたという祝福です。

キリスト者は、自力ではなく子としてくださった御霊によって、神の御心に従って生きるのです。

1．奴隷でなく子どもとして

「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、アバ、父と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難を共にしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であ

ります。」　　（ローマ8:14－16）

一人の紳士が孤児院から太郎君を引き受けてきたとしましょう。

太郎君はしばらくの間、その家の奉公人として働いています。太郎は家を追い出されないため、主人のご機嫌を損ねないために、働くでしょう。でも、その心の底には恐怖があります。もし働きが悪ければ、ご主人は自分をまた孤児院へと送り返すに違いないと知っているからです。

けれども、ある日、主人が太郎君を連れて役場に行き、彼を養子として迎える手続きをしたとしましょう。主人は言います。「太郎君。これからは、私のことを『ご主人様』ではなく、『おとうさん』と呼ぶんだよ。それから、お前はもう奉公人でなく、私のたいせつな息子なのだから、相続人になるために、今までよりもっとたくさんお父さんの仕事を手伝ってもらうからね。でも心配はいらない。お父さんが一緒だ。」

奉公人と子どもの違いとはなんでしょう。奉公人はその働きによって、主人から評価をされるので、いつも主人のご機嫌をうかがって、びくびくしていなければなりません。

しかし、父親は子どもをその働き以前に、その存在そのものを喜ぶものです。

子どもは、自分の存在を受け入れられているという喜びと平安のなかで、また、相続人としての光栄を感じながら、自発的に父がくれるより、多くの課題をなすものです。

キリスト者となりながら、御霊によらず自分の力でがんばっているうちに、奴隷的な意識を持つ場合があります。いつのまにか律法の奴隷に逆戻りして、行ないによって自己評価や自己卑下をして、再び自分は神に嫌われているのではないかなどと、恐怖を感じるのです。

しかし、神は私たちを奴隷としてでなく、子どもとして愛し受け入れてくださり、「アバ、父」と呼びなさいとおっしゃることを心に刻みましょう。そして、御国の相続人として喜んで自分を御父にささげて御霊によって歩みましょう。

2．神の家族の中で成長する

教会とは、父なる神のもとにあって、御子イエスを長子としている神の家族です。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画にしたがって召された人々のためには、神はすべてのことを働かせて益としてくださることを私たちは知っています。なぜなら、神はあらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。」　（ローマ8:28、29）

キリスト者は孤独で神の前に生きる者ではありません。同じように御子イエスを信じて神の子どもとされた兄弟姉妹とともに、長子である御子イエスの姿を目指して、ともに成長していくものなのです。

そして、いろいろな試練も、神は私たちが御子の姿に似た者とされていくために、益と変えてくださいます。

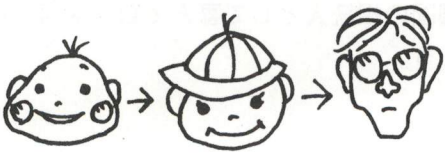
［3］救いの計画

この課の最後に、神の私たちに対する救いのご計画全体を学んでおきましょう。

「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」　（ローマ8:30）

ここには、「あらかじめ定める」「召す」「義と認める」「栄光を与える」という順序で、神の救いのご計画がまとめて記されています。

成長する



1.「あらかじめ定める」

「神は私たちを世界の基の置かれる前から、キリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされ」(エペソ1:4) ました。私たちの救いは自分の行ないにではなく、神の揺るがない選びにあります。

2.「召す」

次に、神はご計画の時に、私たちを世から御霊と福音によって召し出してくださいました。こうして召し出された者たちの群れが教会です。教会とは新約聖書の言語でエクレーシアと言いますが、これは「召し出されたもの」という意味です。

3.「義と認める」

神は、キリストを信じる者のすべての罪を赦してくださいました。

4.「栄光を与える」

そして、召し出し、義と認め、私たちを聖霊によってキリストの栄光にあずかる者として、変えていってくださいます。

そして、最後に、再臨においてか、肉体の死においてか、キリストのみもとに召される時には、キリストに似た者として完成してくださるのです。

> 「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今ある者も、後に来る者も、力ある者も、高さも、深さも、そのほかどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」
>
> (ローマ8:39)

❷ 確認クイズ ❷

Q１．キリストを信じたとき、私は（　　）という主人に対して死んだので、（　　）から解放され、義の奴隷となりました。[1]-1-(1)

Q２．キリストを信じたとき、私は律法に対して死んだので、（　　）の奴隷状態からも解放され，（　　）によって自発的に神のみこころを行ないます。[1]-1-(2)

Q３．キリスト者が罪を犯してしまったときは、どうすればよいですか。

Q４．私が奴隷のようにビクビクと神を恐れるのでなく、喜んで神にお仕えするために、神は私に（　　）とする御霊を与えてくださいました。[2]-1

Q５．私が神の子どもとされたということは、私は神を父とし御子を長子とする（　　）の一員になったということです。[2]-2

Q６．この課で教えられたこと、心に残ったことは何ですか？

※問題の後ろの数字は、この課の項目を表わしています。（例）[1]-1-(1)は、[1]の１.の（1）の項目のことです。
各項目を読み直して、質問に答えてください。

第3課 教会

ある人がイエス・キリストを自分自身の救い主として受け入れ、信じる時、その人は神の家族の一員になりたいという、自然な思いと願いを持つようになります。その神の家族とは、教会のことです。その人は教会の中で、みことばによって養われ、主にある兄弟姉妹との交わりの中で成長し、教会を通じて神とキリストに仕えたいという気持ちを持つようになっていきます。

この課では、教会について学びます。

●この課で学ぶ内容●

［1］教会とは何ですか？

［2］教会の使命（働き）

［1］教会とは何ですか？

◆ ポイント ◆

教会は、

1．呼び集められた群れ（エクレシア）

2．神の民

3．キリストの体

です。

聖書は教会についていろいろな観点から教えています。この中で代表的なものは次のようなものです。

1．呼び集められた群れ（エクレシア）

私たちが教会を思う時、普通、私たちの心に思い浮かぶのは十字架のある教会堂の建物です。確かに教会は、ある建物の中で集まりますが、建物そのものが教会であるわけではありません。教会は教会堂の建物がある前から存在しました。

使徒パウロは彼の手紙の中で、あるクリスチャンの家で集まる教会について何回も言及しています（ローマ16:5、Ｉコリント16:19、コロサイ4:15など）。またヘブル11:38には、「荒野の集会」について言っていますが、この「集会」は、「教会」と同じギリシャ語、エクレシアという言葉を訳したものです。当然、そこには建物がありませんでした。エクレシアは、古代ギリシャ社会で、ある特定の目的のために呼び集められた市民たちの群れを示すものでありました。

パウロは、“神が自分の血をもって買い取られた教会”について言及していますが、やはりここも建物ではなく、信徒たちの団体を意味しています。（使徒20:28）教会の存在は建物に依存しているのではありません。教会の建物がなかった時でも教会はありました。

教会とは、神によって召され、呼び集められたキリスト者の群れを表しているのです（Ｉコリント1:1—2）。

2．神の民

使徒ペテロは教会に対してこのように言いました。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。…あなたがたは、以前は神の民でなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。」（Ｉペテロ2:9－10）

旧約時代にはイスラエルの人々が神の民でしたが、新約時代に入り、教会が神の民になるために呼び集められたのです。このような事実は、パウロが教会を「神のイスラエル」と呼んでいることから明らかです。（ガラテヤ6:16）

旧約時代には、イスラエルの人々がシナイ山の律法の契約に基づき神

の民となりました。しかし、彼らは神によって遣わされたイエス・キリストを受け入れませんでした。そしてその方を十字架につけ、殺すことさえもしたのです。

新しいイスラエルは、ユダヤ人であるか異邦人であるかという区別なしに、ナザレのイエスを主キリストとして受け入れ、その方の十字架のみわざと復活を信じる人々によって構成されました。

彼らは、かつてのイスラエル民族が、不信仰のゆえに神の民としての特権を失い、今はキリストの教会が、新しい真の神の民となったと信じるようになりました。彼らが新しい神の民となったのは、彼らに何かの善い業があったからではありません。ただ神の限りなき恵みと、キリストのみわざによってです。彼らは福音の招きに信仰をもって応答しましたが、その信仰さえも神からの賜物です。(エペソ2:8)。

3．キリストの体

パウロは教会について、また特別の真理を教えました。彼はエペソのキリスト者たちに手紙を書き、その中でキリストと教会の関係についてこう述べています。

> 「また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを教会にお与えになりました。教会はキリストの体であり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです」
> (エペソ1:22−23)。

教会がキリストの体であるという真理は、まず教会とキリストの密接な関係を表しているものとして考えられます。聖書は、キリストは教会のかしら、教会はキリストの体であると教えています。教会はキリストなしには存在することができません。そして、教会はかしらなるキリストの下で成長し、結び合わされ、最後の時まで成長し続けるのです。(エペソ4:16、コロサイ2:19)。

教会がキリストの体であるという真理のもう一つの意味は、キリストにあって信者たちが密接に結び合わされていることを表しています。信

者たちは、キリストにあってともに選ばれた者たちであり（エペソ1:4)、キリストの死と復活にともに与かり（ローマ6:5−11)、同じ聖霊の恵みの中で（Ｉコリント12:13)、再臨のキリストと栄光をともにする人々です（コロサイ3:4)。

そして互いに一つの体のように結び合わされているのです（Ｉコリント10:16、12:27)。このようなキリストにおける一致は地域教会の信者はもちろん（ローマ12:5)、キリストの全体的な教会（エペソ2:16、4:4)まで及ぶものです。

［2］教会の使命（働き）

◆ ポイント ◆

教会の使命（働き）は、
1．礼拝
2．福音宣教
3．信仰教育
4．交わり
5．奉仕
にまとめることができます。

今度は教会に与えられた使命について考えてみましょう。

1．礼拝

教会は何よりも神を礼拝するために集められた群れです。

初代キリスト教会はその初期に、ユダヤ人の神殿礼拝や会堂礼拝に参加したように見えます。しかしそれと同時に、新しいキリスト教的な要素の「パンを裂くこと」、つまり今日の聖餐式と愛餐会の意味が含まれている集いが、彼らの礼拝の場で加えられました（使徒2:46)。

礼拝についてくわしくは後に学ぶことになります（第６課参照)。

2．福音宣教

イエス・キリストは天に昇られるとき、弟子たちに福音を宣べ伝えることを命じられました（マタイ28:19－20、マルコ16:15－20）。

福音宣教とは、イエス・キリストのみが私たちの唯一の救い主であると言うことを宣べ伝えることであり、その目的は、罪人たちを救い出すことにあります。福音宣教は神からの救いへの招きであり、同時にその方に服従し、仕えなさいという命令でもあります。（第８課参照）

3．信仰教育

教会はまた教える使命を持っています。

初代教会では、教育は教会生活の本質的な要素として認められました。初代教会の時代に、福音を信じ、教会の交わりに入ろうとする人が多くありました。新しく信じようとする人がユダヤ人であれ、異邦人であれ、古い世界から離れてキリストの支配の下に生きて行こうとする時、定められた期間で信仰の教育を受け、古い考えや生き方からきよめられる必要がありました。

その教育の目標は、忠実なキリストの弟子となること（マタイ28:20）、あるいは「信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全に大人になって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達する」ことです。（エペソ4:13）。

ですから、教会は忠実にみことばを教える責任があります。

4．交わり

教会に与えられたもう一つの使命は聖徒の交わりです。ギリシャ語新約聖書では、この交わりを「コイノニア」と呼んでいますが、このコイノニアの本来の意味は、あるもの〔物〕を共に所有するとか、ある経験を共に分かち合うと言うことです。新約聖書では、キリストを信じる聖徒が、まず聖霊の働きの中でキリストと交わり、その交わりから得たものを聖徒の間で分かち合うことを表しています。（コリント11:8－9）。

教会は、キリストを信じ告白する同じ信仰告白を土台にして、聖徒が

互いに霊的な祝福と使命を共有し、そして物質面においても、共に分かち合う共同体であると言えます。

5．奉仕

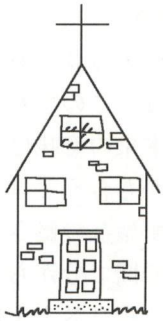
キリストは、ご自身がこの世にこられた目的をこう言われました。「人の子(キリスト)が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためである」(マタイ20:28)。

このように、キリストの体なる教会も、教会内で神に仕え、互いに仕え合うと同時に、この世に仕える使命を持っています。

奉仕の模範は、キリストご自身がその生涯においてよく見せてくださいました。

また、奉仕の一つの模範として、「善きサマリヤ人」(ルカ10:25－37)の奉仕があります。彼は、当時のレビ人、祭司に見捨てられた、強盗に襲われた人を助けました。

教会は聖書に基づき、助けを必要としている「最も小さい者たち」(マタイ25:45) つまり、貧しい人、苦しんでいる人、見捨てられた人に対してキリストの愛をもって奉仕をする使命が与えられています (マタイ25:31－46)。



❸ 確認クイズ ❸

Q１．教会とは、どんなところですか？

Q２．教会の働きには、どんなことがありますか？

Q３．あなたは、これから教会の一員として、どのように歩んでいきたいと思いますか？

Q４．この課で教えられたこと、心に残ったことは何ですか？

第4課 洗礼(バプテスマ)について

使徒の働きは、ペンテコステの日に、ペテロたちが語ったイエス・キリストの救いのメッセージ（福音）を聞いた人たちが、自分の罪を悔い改め、イエス様を救い主として信じ、洗礼を受けて、教会の一員となったことを記録しています。(使徒2:40−41)

私たちは、3課で、神が私たちのために備えて下さった、キリストの教会がどんなものかを学んできました。では、私たちは、その交わりにどのようにして加わっていったらいいのでしょうか？

この課では、教会生活の出発点である「洗礼」について学びたいと思います。

●この課で学ぶ内容●

［1］洗礼(バプテスマ)の意味

［2］洗礼の誓約

［1］洗礼(バプテスマ)の意味

◆ ポイント ◆

洗礼(バプテスマ)式は、

1．キリストの命令に従う時

2．キリストの救いを確認する時

3．キリストの教会への入会の時

4．キリストのために生きることを決心する時

です。

洗礼式で読まれる、日本同盟基督教団式文の洗礼式の「式辞」は、洗礼式の意味と、洗礼を受ける者の心構えをとてもよくまとめていますので、式辞の文章をもとに、洗礼の意味について考えてみましょう。

> ただいまから、御前に立つ（　　）兄弟（姉妹）の洗礼式を執り行ないます。
>
> 洗礼は、主イエス・キリストが制定された礼典であって、父と子と聖霊の御名によって施されます。[1.]
>
> すべての人は罪の中に生まれ、その思いとことばと行為においてみこころにかなわず、罪のうちに滅びる者でした。神はイエス・キリストの贖いによって、信じる者を義としてくださり、永遠のいのちを約束されました。
>
> 洗礼は、主イエス・キリストにあって、罪に対して死に、神に対して生きる者とされ[2.]、イエス・キリストの体である教会の枝として加えられる印です。[3.]
>
> 洗礼を受ける者は、『もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が、この世に生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです』と新たに決意しなければなりません。[4.]

1．キリストの命令に従う時

(1)「洗礼は、主イエス・キリストが制定された礼典であって」

①イエス様の模範

イエス様ご自身も、公生涯の初めに洗礼を受けて、私たちに模範を示されました。(マタイ3:13－16)

②イエス様による制定

洗礼式を制定されたのは、私たちの主イエス・キリストです。(マタイ28:19)

③初代教会の実践

イエス・キリストを救い主として信じた人たちは、洗礼を受けて、弟子の群れに加えられました。(使徒2:40−42)

ですから、イエス・キリストを救い主、主として信じる者が、このお方の命令と模範に従って、洗礼を受けるのは当たり前なのです。

(2)「父と子と聖霊の御名によって施されます。」(マタイ28:19)

洗礼は、「父と子と聖霊の御名によって」施されます。

これは、私たちの救いと信仰の歩みが、父と子と聖霊の三位一体の神の働きと守りの中にあることを表わすものです。

私たちが自分の持ち物に名前を書くように、三位一体の神が私たちにご自分の名前を書き込んで下さって、私たちをご自分のものとして下さったことを表わしています。

2．キリストの救いを確認する時

(1) 私たちは、罪人です。

「すべての人は罪の中に生まれ、その思いとことばと行為においてみこころにかなわず、罪のうちに滅びる者でした。」(式文)

私たちは、神から離れた罪人ですから、自分で自分のことを救うことができません。(エペソ2:1−3)

(2) キリストによってのみ、私たちは救われる。

「神はイエス・キリストの贖いによって、信じる者を義としてくださり、永遠のいのちを約束されました。」(式文)

しかし、神は、自分の罪を悔い改めて、イエス・キリストの十字架の救いを自分のものとして信じた時に、私たちに永遠のいのちを与えてくださいました。(エペソ2:4−9、Ⅰペテロ1:18−19)

(3) 洗礼は、キリストとともに死にキリストとともによみがえったことのしるし

「洗礼は、主イエス・キリストにあって、罪に対して死に、神に対して生きる者とされ……」(式文)

洗礼式は、その時に、私たちの人生に起こった霊的な変化を、目に見える形で確認する、実物教育の時です。(ローマ6:1－13)

①「主イエス・キリストにあって、罪に対して死に」(ローマ6:4、6)

洗礼は、第一に、神を離れて生きてきた罪人である私たちが、キリストとともに十字架につけられて、死に、葬られたことを表わしています。

②「神に対して生きる者とされ」(ローマ6:4－5、8－11)

洗礼は、第二に、キリストとともに十字架の上で死んだ私たちが、今度は、キリストの復活のいのちによって、キリストとともに新しい人として生き始めたことを意味しています。

3．キリスト教会への入会の時

「洗礼は、……イエス・キリストの体である教会の枝として加えられる印です。」（式文）

イエス様は、ご自分とご自分を信じる者の関係を、ぶどうの木と、その枝にたとえられました。（ヨハネ15章参照）

洗礼式は、私たちが、そのキリストという木に接ぎ木された（ローマ6:5）ことを表わすものです。そして、それは具体的には、キリストのからだである教会の一員となることです。

使徒の働きを見ると、イエス様を救い主として信じた人たちは、洗礼を受けて、イエス様の弟子の共同体である教会に加わり、イエス様のからだの一部分として、互いに助け合い、励まし合いながら、キリストに仕え、成長していきました。（使徒2:37－47）ですから、洗礼式は、キリストの教会の一員としてスタートする時なのです。決して、卒業式ではありません。

4．キリストのために生きることを決心する時

「洗礼を受ける者は、『もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が、この世に生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです』と新たに決意しなければなりません。」（式文）

洗礼式は、私たちを愛し、私たちのためにご自分のいのちを捨てて下さった、主イエス・キリスト様の愛に応答する時です。ですから、私たちは、その愛に応えて、「主のために生きる」という決意を新たにするのです。

以下の聖書の言葉は、その決意について教えています。

・ローマ6:12－13
・ガラテヤ2:20
・Ⅱコリント5:14－15

［2］洗礼式の誓約

◆ ポイント ◆

洗礼式の誓約には、
1．唯一のまことの神への信仰を告白します
2．救い主、主イエス・キリストへの信仰を告白します
3．教会生活についての約束をします
という3つの部分があります。

日本同盟基督教団では、洗礼式の中で、洗礼を受ける方に、いくつかの誓約をしていただきます。この誓約は、神と教会（神の家族）の前での信仰告白ですから、一つ一つの意味をよく知り、心から告白できるようにしましょう。

①（　　）兄弟（姉妹）、あなたは天地の造り主、生けるまことの神のみを信じますか。（信じます）
②あなたは、神の御子イエス・キリストの十字架の贖いによって救われていることを確信しますか。（確信します）
③あなたは、聖霊の恵みに信頼し、キリストのしもべとして、ふさわしく生きることを願いますか。（願います）
④あなたは、自分の最善を尽くして、教会の礼拝を守り、教会員としての努めを果たし、あかしの生活をすることを願いますか。（願います）
⑤あなたは、日本同盟基督教団の教憲・教規、および（　　）教会の規則に従い、その純潔と一致と平和のためにつとめることを約束しますか。（約束します。）

この洗礼式の誓約の内容は、3つに分けて考えることができます。

1．唯一のまことの神への信仰を告白します

「あなたは天地の造り主、生けるまことの神のみを信じますか。」(式文)

この誓約は、異教的な環境の中で、生まれ育ってきた私たちが、聖書が教える、唯一まことの神を信じる信仰を告白して、神でないすべての偶像を断固退けることを意味するものです。

イエス様に信頼して生きる者は、もうこの世の偶像やお守り、占いなどに頼る必要はありません。

また、そのようなものに頼ることは「霊的な浮気」で、私たちを愛して、十字架にかかってくださった主イエス様に対しての背信行為です。

ですから、洗礼を受けるに当たって、もしそのような関わりがあったら、きちんと清算しましょう。また、お守りや占いの本などは、処分するようにしましょう。

※このテキストの第８課「あかしの生活」で学びます。

2．救い主、主イエス・キリストへの信仰を告白します

「あなたは、神の御子イエス・キリストの十字架の贖いによって救われていることを確信しますか。」(式文)

キリストの処女降誕、十字架、復活を聖書の教えるとおりに受け入れて、自分の罪を悔い改めて、イエス・キリストを自分の救い主として信じているかどうかの確認です。

※『聖書が教えている基本的なこと』第６～８課を復習して下さい。

3．教会生活についての約束をします

「あなたは、聖霊の恵みに信頼し、キリストのしもべとして、ふさわしく生きることを願いますか。

あなたは、自分の最善を尽くして、教会の礼拝を守り、教会員としての努めを果たし、あかしの生活をすることを願いますか。

あなたは、日本同盟基督教団の教憲・教規、および（　　）教会の規則に従い、その純潔と一致と平和のためにつとめることを約束しますか。」(式文)

私たちは洗礼を受けることによって、キリストの弟子として、正式にキリストの弟子の共同体である教会の一員になることを学びました。

この３つの誓約は、キリストの教会の一員として、教会生活をしっかりと身につけ、牧師の指導のもとに、教会の仲間たちと協力して、神の栄光のために生きていくことを約束するものです。

このテキストでは、特に、この３番目の誓約の内容（教会生活の実際）を、次の課から

・神との交わり
・礼拝を目的とする人生
・教会員の努め
・あかしの生活
・教会の純潔と一致

というポイントで学んでいきます。

◆4 確認クイズ 4◆

Q１．洗礼には、どんな意味がありますか？

Q２．洗礼式の誓約は、どんなものですか。

Q３．この課で教えられたこと、心に残ったことは何ですか？

第5課 神との交わり

私たちが、神を捨てて、自分勝手に生きていた時、神との交わりは、失われてしまいました。(『聖書が教えている基本的なこと』４、５課参照)

しかし、イエス様を救い主として心にお迎えして、神の子どもとされた時から、私たちは、神との交わりに入ることができました。

「神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。」(Ⅰコリント1:9)

私たちは、この神との交わりを通して、クリスチャンとして育てられていきます。

洗礼式の誓約には、「あなたは、聖霊の恵みに信頼し、キリストのしもべとして、ふさわしく生きることを願いますか。」とありました。私たちが、聖霊の恵みに信頼して、キリストのしもべとしてふさわしく生きていくためには、この神との交わりをしっかりと身につけることが大切です。

この課では、私たちが、この神との交わりをどのように持っていったらよいかについて学びます。

●この課で学ぶ内容●

[1] 神との交わりの大切さ
[2] 神との交わりの祝福
[3] 神との交わりの持ち方

［1］神との交わりの大切さ

◆ ポイント ◆

神との交わりは大切です。私たちは、聖書を読み、祈る時間、「静思の時」を通して、神との交わりを確立していくことができます。

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」　（ヨハネ15:5）

1．神との交わりの大切さ

ヨハネの福音書15章で、イエス様は、ご自分と私たちの関係を、ぶどうの木と、その枝にたとえられました。

枝は、枝だけで実を結ぶことができません（15:4）。それどころか、ぶどうの木から離れた枝は枯れてしまいます（15:6）。しかし、枝がぶどうの木にとどまっているなら、豊かな実を結ぶことができます（15:5）。

イエス様を信じた私たちが生きていくためには、このようにイエス・キリストにしっかりととどまっていることが大切なのです。

枝である私たちがキリストにしっかりと結びつくということは、

・私たちが、キリストの体である教会にしっかりと結びつくこと

・個人的に、しっかりと神との交わりを確立していくこと

の２つの意味があります。（教会に結びつくことは、第３課「教会」を参照）

私たちは、毎日、神との交わりを確立していくことによって、キリストというぶどうの木にしっかりと結びつけられて、豊かな実を結ぶものとされていくのです。

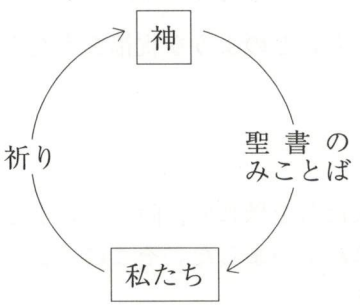
2．神との交わりは双方向コミュニケーション

では、私たちは、神との交わりをどのように持つことができるのでしょうか？

キリストによって、生けるまことの神を信じなかった頃、私たちにとって、神という存在は、「少ないおさい銭で大きな願いをかなえてくれる道具」に過ぎませんでした。

しかし、「私たちの主イエス・キリストとの交わり」は、そんなものとは違います。

「あなたと呼べば、あなたと答える」人格と人格の交わりの世界です。血の通った双方向コミュニケーションの世界です。



・神は、聖書のみことばによって、私たちに語りかけて下さいます。
・私たちは、祈りを通して神に応答します。
・そして、さらにみことばと祈りによって、神と私たちの交わりが続けられ、深められて行きます。

私たちは、「みことば」と「祈り」という、2つの方法を通して、神との生きた交わりを体験することができます。

これから始まるクリスチャン生活を送るために、「みことば」と「祈り」の位置付けをしっかりと覚えてください。

［2］神との交わりの祝福

◆ ポイント ◆

神との交わりの祝福は、
1．主イエスとの新鮮な出会い
2．主イエスを知る
3．主イエスとともに歩み始める
4．主イエスに似た者に変えられる
ことです。

では、このような神との交わりは、私たちにどのような祝福をもたらしてくれるのでしょうか？

1．主イエスとの新鮮な出会い

イースターの夜、弟子たちは、ユダヤ人たちを恐れて、隠れていました。彼らは、愛する主を失って、途方に暮れていました。そこに、よみがえられた主イエス様が現われて下さいました。

よみがえりの主に出会ったとき、

・弟子たちの恐れが消えました

・弟子たちは、主にお会いして喜びました

・弟子たちの心の中に神のいのちが流れこんできました（ヨハネ20:19－20）

彼らと同じように、私たちも、みことばと祈りを通して神との交わりの時間を持つ時に、今も生きておられる主との新鮮な出会いを経験することができます。（哀歌3:22－24）

2．主イエスを知る

あまりよく知らない相手のことを知って、仲良くなるためには、その人とできるだけ一緒にいて、その人の話を聞き、その人がどんな人かを

知ることです。

私たちも、毎日、聖書を読み、祈り、神との交わりを重ねていくときに、神がどんなお方かが分かってきます。そして、神のいのちが私たちの生活に流れ込んでくるのです。

イエス様は、「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」（ヨハネ17:3）と言われました。

3．主イエスとともに歩み始める

毎日、聖書を読むことと、祈ることを通して神との交わりの時を持ち、神と新鮮な出会いをして、神がどのようなお方か、私たちの人生にどのようにかかわって下さるかが分かってくると、私たちは、このお方に信頼して、自分の人生を委ねて生きることができるようになります。

私たちは、この時間を通して、いつもともに歩んで下さるイエス様と心を合わせ、息を合わせ、歩調を合わせていくのです。運動会の二人三脚のように、みことばと祈りを通して、イエス様と、「一。二。一。二。」と調子を合わせて、イエス様とともに歩む生活をスタートしていくことができます。（マタイ28:20）

4．主イエスに似た者に変えられる

筆者夫婦は、お互い血のつながりがないのに（当たり前）、新婚時代から、「顔がよく似ていますねー。」と言われました。牧師夫婦は、一般のサラリーマンに比べると、いっしょにいて、顔と顔を見合わせている時間がはるかに多いので、ひょっとすると似てくる確率が高いのでしょうか？顔だけではなく、長く夫婦をやっていると、考え方や食べ物の好み、性格から、しぐさまでも似てくるものなのでしょうか？

人間同士の交わりでもこのようなものです。まして、まことの神との交わりを重ねていくと、どのようなことが起こってくるでしょう？

その交わりを通して、神は私たちの罪をきよめ、私たちを主イエスに似た者に造り変えていって下さるのです。

まさしく、「主と交わればきよくなる」のです。(Ⅱコリント3:17−18)

[3] 神との交わりの持ち方

この神との交わりを身につけていくには、毎日、計画的に聖書を読み・祈る時間を持つとよいでしょう。この時間のことを「静思の時(ディボーションともいう)」と呼んでいます。

ここでは、具体的にその時間の持ち方を紹介したいと思います。

1. いつ持つか?

神との交わりの時間は、私たちの人生をともに歩んで下さる主イエス様と息を合わせ、歩調を合わせて歩み始める時間と言いました。

だとしたら、いつがいいでしょう? やはり、私たちの一日の活動が始まる前がいいですね。主イエス様も、一日の忙しい活動が始まる前に、父なる神との交わりの時間を持っておられました。(マルコ1:35)

・毎日、15〜30分を「静思の時」に使いましょう。
・朝、一日の活動を開始する前の時間を使いましょう。
・今までより、30分早く起きる工夫をしましょう。
・もし、朝がむずかしい場合は、一日のどこかで時間を作りましょう。

2. どのように?

教会の聖書日課に従って、その日の聖書の箇所を読み、祈りましょう。

(1) 祈る

神が私たちの心を整えて、聖書のことばがよく分かり、神のみことばによって育てられるように祈りましょう。(詩篇119:18)

(2) 読む

聖書のみことばは、私たちの魂のごはんです。(Ⅰペテロ2:2)

ごはんをよくかんで食べるように、その日の聖書箇所を意味をよく考えて、よく味わって読みましょう。できるだけ声を出して読むといいでしょう。

(3) 考える

その日の聖書の箇所を通して、神が私たちに教えて下さっていることをよく考えましょう。ノートを作って、短くても教えられたことを書き留めておくといいでしょう。

以下のようなポイントを参考に考えるとよいでしょう。(いつでも、すべてのポイントが当てはまるわけではありません。)

・神（父なる神、主イエス様、聖霊）はどんなお方か？どんなことをされるか？
・神が、私に期待しておられること、命じておられることは何か？
・神の約束、祝福はどんなものか？
・聖書に登場する人物から、
　見習うことはどんなことか？
　まねをしてはいけないことはどんなことか？
・教えられたことを、どのように今日の生活に当てはめたらよいか？

(4) 祈る

教えられたことを、今日の生活に適用できるように祈りましょう。

また神に感謝すること、悔い改めるべきことがないでしょうか？『聖書が教えている基本的なこと』第10課教会生活入門で学んだ、祈りの型「ＡＣＴＳ（アクツ）」を用いて、お祈りしましょう。

神は、私たちが神に呼びかけ、神に祈ることを喜んで下さいます。

ですから、

・神が祈りに答えてくださることを期待して祈りましょう。(ヘブル11:6)
・本音で祈りましょう。(詩篇62:8)
・あきらめないで祈りましょう。(ルカ11:5−10、18:1)

(5) 実践する

神は、私たちがご自分のみことばを聞きっ放しにしないで、毎日の生活の中でみことばを実践することを願っておられます。どんな小さなことでも、その日教えられたことを実行してみましょう。(ヤコブ1:22)

主が、あなたとともにいて下さり、あなたの生活の中にみことばを適用して下さいます。

(6) 分かち合う

「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」

(コロサイ3:16)

このように毎日、神との交わりを積み重ねて行くなら、私たちは主が私たちの生活に豊かにかかわって下さることを体験することができます。

その恵みを教会の兄弟姉妹とともに分かち合いましょう。

神との交わりを通して、どんなことを教えられ、主が自分の生活にどのように働いて下さったかを語ることによって、私たちは改めて神の恵みを確信し、主との交わりを喜ぶことができます。そのことによって、一人の人に与えられた神の恵みが、教会のみんなの恵みとなります。そして、教会は、みことばの恵みによって成長していくのです。ですから、ぜひ、与えられた恵みを積極的に分かち合ってください。

今まで、「静思の時」という時間を通して、神との交わりを育てていくことを学んできました。

もちろん、神との交わりは、この形だけに限定されるものではありません。私たちは、いつでも祈ることができますし、いつでも聖書を読むことができます。

とにかく毎日、継続して、聖書を読み、祈ることを通して、神との交わりの時を持ち、神の人として、神と人のために十分に役立つ人として成長させていただきましょう。(Ⅱテモテ3:16−17)

☆聖書通読、暗唱聖句の勧め

●聖書通読

静思の時の聖書の読み方が、各駅停車なら、聖書通読は、急行、特急です。聖書をどんどん読んで、聖書の骨組みを理解していく読み方です。

・１日に３章読めば、１年に１回
・１日に10章読めば、１年に３回
・１日に13章読めば、１年に４回
・１日に20章読めば、１年に６回

旧・新約聖書を読むことができます。

それぞれのペースにあわせて、時間を見つけ出して、聖書通読にも取り組んでみましょう。

●暗唱聖句

暗唱聖句は、徒歩の旅のようなものです。静思の時や聖書通読の中で、教えられたみことば、励まされたみことばなどを覚えましょう。ただ言葉を覚えるだけではなく、その意味をよく考え、祈りつつ、みことばを心に焼き付けて下さい。（詩篇1:2−3）

◆5 確認クイズ 5◆

Q１．神との交わりは、どうして大切なのですか？

Q２．みことばと祈りには、どんな関係がありますか？

Q３．神との交わりの祝福はどんなものですか？

Q４．この課で教えられたこと、心に残ったことは何ですか？

□静思の時を通して与えられた恵みのあかし□

●その時の私の状態

今から10年前(1990年)に、私の母が、ある病気になり、頭にポンプを埋め込む手術をしました。しかし、残念ながら、思ったほどの効果がなく、どうしても自分の家での生活を続けることがむずかしくなり、クリスチャンの養護老人ホームでお世話になることになりました。

そして、8年前の夏に、母は老人ホームの風呂場で足を滑らせて、背骨を圧迫骨折してしまいました。骨折を治すためには、寝ていなければなりません。ところが、母の病気のためには、寝たきりでいることは良くないのです。案の定、頭の中にポンプの許容量を超える髄液がたまり始めて、母の具合が悪くなって来ました。

その時、母は、骨折の治療で老人ホームの近くの提携病院に入っていたのですが、そこでは母の病気の治療はできず、寝台車で手術をした病院まで運ぶことになりました。(車で約2時間)

新しい病院になんとか無事に着き、ほっとしたのもつかの間、主治医の診察が始まりました。先生は、母の体がどのくらい固くなっているか、どこが動かなくなっているかなど、チェックしました。すると、それまでうとうととしながら、先生の質問に答えていた母が、急に目を見開いて、わめき始めたのです。

「お父さん。助けて！殺される！」

そして、動かないはずの足で、ものすごい勢いで先生を蹴りつけました。

私は、そんな母を一度も見たことがありません。しばらく母の興奮は続きました。もちろん、今までも、母の病気で修羅場を見てきましたが、こんな強烈なことはありませんでした。

このショックで、それまでピンと張っていた、私の緊張の糸がプッツリと切れてしまいました。病院からの帰り、薄暗い電車のホームで、私は、「もう耐えられない。しばらく、どこかへ消えてしまいたい。」と、

このままどこかへ行って、一週間くらい行方不明になろうかと思いました。

しかし、教会の奉仕もありますし、家族もいます、そして何よりも一生懸命に母の看病をしている姉を置いて、たとえ一週間とはいえ、ドロンなんてできません。重い足取りで家に帰り、うなだれて一夜を過ごしました。

●みことばの恵み

そんな気持ちの日が何日か続いたある日のことです。

当時、私は、新約聖書の使徒の働きを読んでいました。

その朝、７章を読みました。イエス様の弟子の一人、ステパノが、ユダヤの人たちに向かって、旧約聖書のあらすじを語っている箇所です。

その中で、私は、神がモーセに語られたみことばに心を引かれました。それは、神がモーセを選んで、エジプトで奴隷生活をしているイスラエルの民を救い出すために遣わされる場面です。

「わたしは、確かにエジプトにいるわたしの民の苦難を見、そのうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために下って来た。さあ、行きなさい。わたしはあなたをエジプトに遣わそう。」

（使徒7:34）

私は、この箇所を読んだ時に、

・神は、私たちの家族の苦しみを、ちゃんと見ておられる。

・私たちのうめき声をちゃんと聞いておられる。

・そして、イスラエルの民を助けてくださったように、私たちをこの苦しみから、助けて下さるということが分かりました。

そのお方が私とともにおられるのなら、私がモーセのように遣わされて行くべきところはどこでしょうか？するべきことは何でしょうか？

私がするべきことは、ひとつです。

このみことばをもって、母と姉、私の家族を励まして、神が必ず母を助けてくださることを信じて、明るい気持ちで看病することです。私には、とてもそんな元気も力もありませんでした。しかし、神がそう言わ

れるのなら、きっとできると信じて、神の助けを祈りました。

●みことばの実践

それでさっそく、このみことばのあかしを家内に話しました。また、その日の午後、病院に行って、姉に、母に話しました。

私たち家族は、このみことばに支えられました。3ヶ月の入院生活の後、母は、体調を取り戻して、元気に退院することができました。

それから、母は、また体調を崩して、何回かの入退院を繰り返しました。本人にとっても、家族にとっても、あのときと同じような苦しい思いをすることがありました。しかし、そんな中でも、使徒7:34のみことばに支えられて、私たちはそのときを乗り越えてくることができました。

そして、母は、2000年5月12日に、80年の生涯を終えて、父の待つ天の御国に安らかに召されて行きました。

「わたしは、確かにエジプトにいるわたしの民の苦難を見、そのうめき声を聞いたので、彼らを救い出すために下って来た。さあ、行きなさい。わたしはあなたをエジプトに遣わそう。」

（使徒7:34）

第6課 礼拝を目的とする人生

日本同盟基督教団の洗礼式の式文の中には、洗礼を受ける人が、神に対してする誓約が出てきます。その誓約の第四項目に「自分の最善を尽くして教会の礼拝を守ります。」という誓約が出てきます。

この課では、この礼拝を守ることについて学びます。

●この課で学ぶ内容●

［1］日曜日は主の日
［2］礼拝の実際
［3］礼拝の心得
［4］まとめ―礼拝出席を実行しよう！―

［1］日曜日は主の日

◆ ポイント ◆

1．日曜日は安息の日
2．安息日の定めは神の大いなる恵み
3．安息日を守る者は祝福される
4．安息日が土曜日（旧約）から日曜日（新約）に
5．公同の礼拝

礼拝は、クリスチャン生活の中心です。

クリスチャン生活とは、教会生活、教会生活とは礼拝生活といっても過言ではありません。クリスチャンは、礼拝を中心に生活スケジュールを立てましょう。

礼拝は単なる儀式でもお勤めでもありません。礼拝とは、愛する神にお会いし、神を仰いで神に栄光を帰することです。喜んで、何をおいても礼拝に集いましょう。

礼拝はまた同じ教会のクリスチャンが一堂に集まるので、キリストの体としての交わりが与えられ、互いの信仰に大いに励みや慰めが与えられる時でもあります。

1．日曜日は安息の日

日曜日は休日でも、レジャーの日でも、ねて(寝て)よう日でもありません。神を礼拝する日です。

世間では日曜日は週末であり、遊ぶ日、休む日になってしまっています。しかし、日曜日は週の初めの日であり、本来は神を礼拝して一週間を始めていく日です。また、ある人たちにとっては日曜日も何も無い、働き続ける日になっています。しかし、神の言葉、聖書は人間の体と精神と魂には毎週一回休みが必要だと教えています。毎週、礼拝に集う中で人は真の安息を与えられ、疲労も病気も様々な精神的緊張も柔らげられ、生きる新しい力が神から与えられるのです。(出エジプト20:8－11)

2．安息日の定めは神の大いなる恵み

7日に1日、安息の日を持って礼拝するようにという教えが聖書の中で定められたのは、今から約3,500年も前のことです。

人間が人間らしく扱われないで、奴隷たちが馬や牛のようにこき使われていた時代に、聖書は7日に1日休めと命じたのです。家族すべて、奴隷も、家畜に至るまで安息を取り、神を礼拝せよと命じているのです(出エジプト20:10)。

日本では明治時代になって、キリスト教に基づく今のカレンダーが入ってきたのです。それまでは、丁稚奉公にとっては、休みは盆と暮れしかありませんでした。ですから、安息日の定めは本来、画期的な、神の恵み深さを十分に表している戒めです。こんな大昔にまさに現代的法律が定められ、書き残されていることに素直に感動し、神の偉大さを知っ

てほしいのです。

3．安息日を守る者は祝福される

礼拝を喜んで守る人は、祝福されるという神の約束が聖書にはたくさん出てきます。イザヤ56:1－8、イザヤ58:13、14の個所を、ぜひ読んでください。きっと励まされます。

礼拝を生活の中心に守りながら仕事を行なう人は、神から良く働く力をいただきますし、また多く働く力もいただくのです。

アメリカの西部の開拓時代のことでした。西部の広大な土地が本人の申請と開墾の努力次第によって自分の物になるという、夢のような法令が政府から出された時、多くの人がわれ先にと西部に走りました。人々は争って休む事なしに、一足でも先に西部に着こうと馬車を走らせ続けました。その人々の中に牧師の家族がいました。彼らは6日間、馬車を走らせ、日曜日がくると誰が先に行こうと気にせず、馬車を留め、神を礼拝し、1日ゆっくり安息の時を持ちました。そして月曜日からまた馬車を走らせました。

誰が一番早く西部に着いたでしょうか。その牧師家族でした。休まず走り続けた人たちは無理をしたため、馬車も馬も怪我や故障が続出し、結局遅れてしまったのです。

4．安息日が土曜日（旧約）から日曜日（新約）に

安息日は、旧約聖書においては、神の天地創造の業に続いて7日目（土曜日、正確には金曜日没から土曜日没まで）であり、その日に礼拝が守られました（創世記1、2章、出エジプト20:8－11）。

しかし、新約聖書では、主イエス様が復活された日曜日が安息の日、礼拝の日となったことが書かれています。

・ヨハネ20:19

週の初めの日、復活されたイエス様が弟子たちが集まっている所に来られ、ご自分を現わされ、御言葉を語られたことが書いてあります。

・ヨハネ20:26

8日後の次の日曜日に（イスラエル人の日にちの数え方は、その日も一日と数えます。）、また弟子たちが集まっている所にイエス様が現れて、御言葉を教えられたことが書いてあります。おそらく、これらが主の復活の日を記念の日とする走りです。

・使徒1:3、2:1−2

「イエスは苦しみを受けた後、40日の間、彼らに現れ」、昇天されました。そして五旬節の日（50日目の意味）に、弟子たちが一つ所に集まっていた時、聖霊降臨の出来事が起こりました。それで復活から50日目（私たちの数え方では7週後）の日曜日に摂理的にペンテコステの出来事がありました。

・使徒20:7、第一コリント16:2、ヨハネの黙示録1:10

初代の教会において、週の初めの日曜日に、聖餐式や献金やメッセージを聞くために集まっている様子が書かれています。

使徒たちの間で、おぼろげな形で始まった日曜日の礼拝が、初代教会の歩みの中で次第にはっきりと定まっていったと思われます。そして黙示録が書かれた西暦90年頃には、日曜日が主の日と呼ばれ、日曜日が礼拝の日としてすっかり定着したことを物語っています。

5．公同の礼拝

日曜日の礼拝は公同の礼拝と言われています。

日々、聖書を読み祈る個人的礼拝と違って、定められた時、定められた場所で、キリストの名において集まる礼拝を公同の礼拝と言います。

ですから、公同の礼拝には二つの具体的要素があって、一つは定められた時です。これは日曜日です。もう一つは定められた場所（それぞれの場所に建てられた一つ一つの教会）です。この二つの要素は大切です。

(1) 定められた時

これまで見てきたように、主イエス様が復活された日曜日を「主の日」として、教会は礼拝を守ってきました。

日々の個人的礼拝や教会のウイークデーの様々な礼拝を軽んじるわけではありません。ただ主の日の公同の礼拝と混同してはならないのです。

(2) 定められた場所

また、定められた場所に関しては、クリスチャンは神が各自に与えられた教会で礼拝を捧げます。自分の家があるように、自分の教会があるのです。自分勝手に礼拝の場所を変えるなら、かえって一番大切な礼拝の場を失うだけです。神が自分に与えられた自分の教会の礼拝を大切にしなければなりません。

［2］礼拝の実際

◆ ポイント ◆

1．集会の中に臨在される神
2．聖書は集会を重視する
3．礼拝厳守
4．イエス様の模範
5．礼拝の二つの面

1．集会の中に臨在される神

キリスト教会は集まることを大切にします。

マタイ18:19､20に、「もし、あなたがたのうち二人が、どんな事でも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。二人でも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」と書いてあります。

二人でも三人でも、私の名において集まる所には私もいる、イエス様がそこにおられる、臨在される、これは一人でメッセージテープを聞くだけでは望めない集会の持つすばらしさです。

大人だけでなく、子どもも礼拝者のひとりです。赤ちゃんや幼児は集会に出ても、確かに何も分からないかもしれません。しかし、集会の中におられるイエス様が子どもたちを祝福されます。子どもと共に礼拝に集う意味もそこにあります。

2．聖書は集会を重視する

多くの日本人にとって、神社へ行くのは初詣とお祭りがある時ぐらいです。お寺に行くのも葬式や墓参りの時ぐらいです。

しかし、教会は毎週、礼拝や伝道会や祈祷会や教会学校などがあります。神は、クリスチャンを交わりの中に置かれました。信仰を持った頃、礼拝、伝道会、祈祷会を大切にすることが、強い信仰者に育つ一番の近道だと何度も教えられました。それから何十年の経験を踏まえて、それは本当だと確信しています。

いつも集会に出て御言葉を聞き、主の御顔を多く仰ぎ見る人ほど、イエス様の心を良く理解し、イエス様を更に愛する信仰者として成長するのは、マリヤではありませんが当然の結論です（ルカ10:39－42）。

集会に励んで、信仰を育て、誰よりも主イエス様とこの時代の人を愛する者になりましょう。

3．礼拝厳守

多くの集会の中で中心は、言うまでもなく主日の礼拝です。

この2,000年間、キリスト教会は大げさな言い方でなく命がけで主日礼拝を守ってきました。日曜日は主の日です。私たちの思いで勝手に過ごしてはなりません。礼拝をいい加減にすると信仰は脱線していきます。礼拝を休むことは命取りとなります。

先の項目で集会全般について重視すると言いましたが、礼拝の場合はそれでは足りないのか、先輩クリスチャンたちは「礼拝厳守」と言ってきたのです。韓国の教会ではそれでも足りなくて「礼拝死守」と言うそうです。礼拝をどんなに大切に考えているか、その熱い思いが伝わってきます。信仰の先輩たちのこの姿勢を見ならいましょう。

信仰の基本である礼拝を捧げることさえも人の顔色や、自分の都合で適当にしてしまうとするなら、どこにクリスチャンのしるしがあるのでしょう。「今度、都合が悪いので礼拝来られません」と簡単に休んではなりません。都合の悪い所を何とか工夫して礼拝に出るのです。神はそれに答えて下さいます。仕事によっては看護師さんの三交代勤務のように、どうしても全ての礼拝に出られない人もいます。また全く出られない職種の人もいます。しかし、教会も本人も神に礼拝に出られるように祈り求めて取り組んで行く時、必ず解決が与えられます。

4．イエス様の模範

私たちの主であるイエス様は、安息の日を大切にして、私たちに模範を示しておられます（マルコ1:21、ルカ4:16）。

この聖書の個所には、「主はいつもの通り安息日に会堂に入り」と書いてあります。いつもです。主イエス様は、安息の日には礼拝に出席されるのが習慣だったのです。

ルカ22:39、40には、イエス様が「いつもの」ゲッセマネの園で、「いつものように」祈られたと書いてあります。

イエス様を見ると、礼拝や祈りが、「いつものとおり」というほど習慣化しておられました。

習慣は第二の天性と言います。私たちも礼拝や祈祷会出席を良い習慣としましょう。礼拝や祈祷会は参加するものとしましょう。

5．礼拝の二つの面

礼拝には、二つの面があります。

礼拝は、第一に、神が私たちを招き、みことばを通して恵みを注いでくださるときです。また、第二に私たち自身を神に献げるときでもあります。

すなわち、神から人への語りかけの面と、人から神への応答の二つの面です。

(1) 神から人への語りかけの面

神から人への語りかけには、招詞、聖書朗読、聖餐式や説教などがあります。ここでは、特にみことばの説教についてふれておきます。

私たちは、特に説教を通して慰めや励ましをいただいて、信仰生活が強められ、守られ、導かれていきます。この礼拝の中で説教を重視する考え方は16世紀のルターたち宗教改革者以来のプロテスタントの伝統です。説教について、聖書は伝道者に対して真理のみことばをまっすぐに説き明かす熟練した者になるよう努め励めと教えています（Ⅱテモテ2:15)。

同時に信徒に対して、説教を聞くとき、人の言葉として聞くのでなく、神からの語りかけの言葉として聞くことの大切さを教えています。（Ⅰテサロニケ2:13)

説教に対する双方の正しい在り方が、礼拝を真の礼拝として整えていくのです。教会の礼拝をはじめ各集会を真に神の臨在される、また神の栄光があらわされる礼拝として育てていく責任は牧師と信徒双方にあることを覚えなければならないのです。

(2) 人から神への応答の面

礼拝の中の祈りや賛美や献金は、人から神への応答の面です。

礼拝は一週間の守りと祝福を覚えて心からの感謝の祈りをささげる時、また神の愛と真実を覚えて心から力一杯賛美を献げる時、さらに、自らと自らの全てを献げる献身の時でもあるのです。献金はその現われです。

このことを良く考えると、最初の前奏から最後の祝祷に至るまで礼拝の要素は全て大切です。

［3］礼拝の心得

◆ ポイント ◆

1．一回一回の礼拝を大切に
2．礼拝を休む時には連絡する
3．子どもはＣＳと礼拝と両方に出席

1．一回一回の礼拝を大切に

一回一回の礼拝を大事にし、そこに主がおられるとして御前に仕えるのが、信仰者の在り方です。

一回ぐらい休んでも別に問題ないとするか、一回一回の礼拝を大事にし、そこに主イエスがおられるとして励んでいくかは、天と地の開きを生みます。

礼拝を守っていかないと大きな恵みを失う危険性があります。礼拝を軽視する所には、本当の充実した信仰生活が生まれてきません。礼拝を中心にして生活を組立てましょう。礼拝、伝道会、祈祷会を一週間の生活のスケジュールの中に入れましょう。それが神の恵みと祝福をいただく一番の近道です。

礼拝に遅れて来たり、礼拝が終わっていないのに席を立つべきではありません。たまに、礼拝に遅れたり、早く退出することはあっても、いつもそうなら考え直すべきです。

神に良き礼拝をおささげしようと、前の日から礼拝に行く用意をし、

十分睡眠を取り、献金もきれいなものをあらかじめ準備して出席しましょう。

2．礼拝を休む時には連絡する

礼拝は絶対休まない気持ちが大切です。

しかし、万が一休む場合には牧師に連絡しましょう。連絡は礼拝前の忙しい時でなく、土曜日までにしましょう。

牧師からそう言われると、ある人はチェックされているようでいやだと言います。また別の人は忙しい先生にわざわざ私一人のために手間取らせたくないと言う人もいます。どちらも違います。

私たちは娘が遅く帰るようなら必ず連絡しなさいと言わないでしょうか。クリスチャンは霊的な意味で主にある同じ家族です。そして、牧師は特にその群れの責任者として主に立てられているのです。一人一人の事を気にかけているのです。毎日、一人一人の名をあげて祝福されるように祈っています。そして一週間の中で一番大きな恵みを受ける時が礼拝の時です。その恵みの時を逃すのですから、特に祈るのです。そして他の集会に来なさいと励まします。また帰省したり、出張した先で礼拝に出られそうなら、教会の場所を教えたりするのです。親が子のことを心配するのは当たり前です。最高の恵みを失わないように配慮するのは当然なのです。

3．子どもはＣＳと礼拝と両方に出席

クリスチャンの親たちの中には、子どもを教会学校と礼拝と両方とも出席させるべきだろうか、子どもが両方出て、午前中ずっと静かにしているのは大変ではないかと考える方がいます。

この点に関しては教会の長い歴史の中で、教会は両方とも勧めてきました。子どもも含め全家族そろって礼拝に出席することは、旧新約聖書にたくさん記されています（出エジプト10:9、エズラ10:1、ヨエル2:15－16、マタイ21:16）。それは何千年間にわたって教会で重要視されてきました。

すなわち、子弟への信仰継承のために、クリスチャンの親の大切な働きでした。

また教会学校は教会の活動の中に加えられて300年ほどの歴史を持っています。

教会学校は起こりからいって、教会の外の子どもたちを対象とする伝道的な性格の強いものです。

教会学校の事情は教会によって違うでしょうし、教会によって大人と子どもの礼拝様式に多様性があるでしょうが、一般論として教会学校と礼拝は対立するものではなく、補完的なものでどちらも子どもにとって必要なものなのです。

二つとも出席させることは親が考えるほど、子どもにとって大変ではありません。小さい時からその習慣にしていれば少々波立っても問題はありません。また大きくなってから二つとも参加させるとしても、しばらく子どもは大変というより、嫌がるでしょうが、親がその方針を貫けば子どもはやがて受け入れます。

そして実際の経験から、確信を持って言えることですが、神の祝福が豊かに豊かにその子どもたちに注がれ、神も親と共に責任を持って子どもを守り育てて下さることが本当によく分かってきます。

これは、筆者の個人的なあかしです。私は信仰を持って、35年間礼拝を大事にしてきました。私が信徒だった時から、そうでした。

幼稚園の時には、日曜日の行事はカットして子どもを連れて礼拝に出ました。小学校では日曜日の行事には子どもだけが出ました。親は礼拝に出て、何とか工夫して時間に間に合えば学校に見に行きました。子どもが小学校高学年になったときには、聖書を読むように指導し、中学生になった時には伝道会にも共に出席し、洗礼を受けたら祈祷会にも一緒に出たのです。集会に出る楽しさ、恵みを体で味わわせたのです。

親が一緒に運動会に出ないと子どもが寂しがる、子どもの心を傷つける、そんなに教会、教会ばっかりのワンパターンでは子どもの個性を殺してしまう、いろいろな思いがありました。しかし今、みな大きくなった子どもたちを見る時、しっかり信仰を受け継ぎ、一人一人個性豊かな

子に育ち、親も考えなかったほど神に恵まれて歩んでいます。長い時間で見ると、神の祝福の大きさが良く分かります。子どもたちに礼拝の大切さ、集会のすばらしさを教えましょう。

［4］まとめ―礼拝出席を実行しよう！―

クリスチャンは礼拝を大切にせよ。礼拝は信仰生活の基本中の基本ですとお話ししてきました。

なお、先輩たちの本をひもとけば、礼拝出席についてすばらしい勧めを、数限りなく見出すことが出来ます。

主の日の礼拝は、キリスト教会がこの2000年間、大切に守ってきたものです。

私たちにとって大切なことは、礼拝に集うということを実行するかどうかです。いくら礼拝について千の説明を聞いても実行しないなら、何にもなりません。礼拝について知的に理解しても、礼拝に出席しなかったら何にもなりません。

理屈抜きで、まず毎週礼拝に出席することが大切です。毎週、いそいそと喜んで礼拝の席に連なるなら、聖書に書いてある通りの大きな祝福を受けます。実行してみてください。

❻ 確認クイズ ❻

Ｑ１．神を第一とする生活とは、具体的にどのようなことですか？

Ｑ２．なぜ日曜日が礼拝の日になったのですか？

Ｑ３．礼拝には、二つの面がありますが、それは何と何ですか？

Ｑ４．礼拝の心得には、具体的にどんなことがありますか？

Ｑ５．この課で教えられたこと、心に残ったことは何ですか？

第7課 教会員の務め

「神の子」とされた私たちは、神に仕える特権を与えられています。具体的に私たちは、「神の家族」である教会の一員として「キリストのからだ」を建て上げていくのです。

神の恵みに対する応答として、喜んでお仕えしたいものです。そのために私たちはどのような努めを果たすことができるのでしょうか？

●この課で学ぶ内容●

［1］教会員の務めとは
［2］教会の経済を支える奉仕
［3］教会の活動を支える奉仕

［1］教会員の務めとは

神から与えられている賜物を、キリストのからだを建て上げるために用い、互いに仕え合うことです。

「私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。」（エペソ4:7、12、13）」

「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧

めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。」　(ローマ12:6−8)

教会員の務めとは、ひとりひとりが神から与えられているものを用いて、キリストのからだを建て上げるためになされる奉仕です。

私たちは、神から多くのものを受けています。それらは私たちが管理するようにと、神からゆだねられているものなのです。ゆだねられているものはひとりひとり違います。キリストのからだを建て上げるためには、いろいろな働きが必要だからです。

私たちの時間、賜物、財産をこのために用いてこそ、神からゆだねられているものを良く管理しているということができます。奉仕を通してキリストのからだを建て上げ、私たち自身も成長していくことができるのです。

教会の奉仕には、

・教会の経済的必要を支える献金という奉仕と

・教会の活動を支えるさまざまな奉仕

があります。

[2] 教会の経済を支える奉仕

◆ ポイント ◆

教会の経済を支える奉仕とは、キリストの愛に応える感謝と献身の表われとして、神から与えられている経済的な祝福の一部を、神にささげて、教会を経済的に支えることです。

1. 献金とは？

「私は神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物

としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」
（ローマ12:1）

キリストは、私たちのためにいのちを捨ててくださいました。その愛に応えて、私たちも自分自身を神にささげることが勧められています。

献金とは、そのキリストの愛に応える感謝と献身の具体的な表れです。キリストの愛を受け入れた者の応答としてささげられるものです。

2．献金の心得

「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。神は、あなたがたを、常にすべてのよいことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」（Ⅱコリント9:6−8）

献金は、人に対して行なうことではなく神の前になされるものだということをよく心得ていましょう。神への感謝と献身の告白だからです。

神は、ひとりひとりの心をご覧になります。イエス様の献金に対する評価を確かめてください。（マルコ12:41−44）

神は、献金するために必要なものも備えてくださるお方です。与えられているものの中から信仰をもって、豊かに感謝を表しましょう。

またお金の取り扱いは、明瞭にして、まちがいや誤解のないようにしましょう。分からない点があったら、教会の会計担当者に尋ねましょう。

3．献金の種類

私たちは、神への信仰と献身の表れとして次のような献金をすることができます。

(1) 十分の一献金（月定献金）

旧約聖書には、十分の一を神にささげる律法があり、神への務めとし

て守られて来たことが記されています。イエス様もこの献金を「おろそかにしてはいけません」と言われました。(マタイ23:23)

与えられた収入の十分の一をささげます。収入があった場合にはすぐ「これは神のもの」として分けましょう。十分の一献金をささげることは、神の祝福を受けることになります。

「人は神のものを盗むことができようか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのものを盗んだでしょうか。』それは、十分の一と奉納物によってである。あなたがたはのろいを受けている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民全体が盗んでいる。十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。－万軍の主は仰せられる。－ わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」　(マラキ3:8－10)

この献金は教会の活動の基本を支えることになります。

(2) 集会献金

主に主日礼拝で献げる献金です。神への感謝と服従の思いをこめてささげるものです。自分で心に決めた額を心をこめてささげましょう。

(3) 感謝献金

神の恵みや導き、守りや祝福を覚えて、記念して、特別な感謝をささげます。

イースター、クリスマス、誕生日、バプテスマ記念日、結婚記念日、召天記念日、入学、卒業、就職、退院、出産、結婚、上棟など人生の折々に導き手であられる神への感謝献金をささげましょう。

(4) 特別指定献金

特別な計画のためにささげられます。主に導かれて重荷を与えられ、その目的のためにささげます。国内外の宣教支援、会堂建築、増改築、特別伝道会など、主の働きのために喜んでささげましょう。

その他、他教会、伝道諸団体への協力献金、また神学校賛助などのためにささげたいものです。

[3] 教会の活動を支える奉仕

◆ ポイント ◆

私たちは、時間と自分の力を献げて、キリストの教会が建て上げられていくために、教会の活動を支える奉仕をします。

1．奉仕の心得

「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。」(ローマ12:11)

「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。」(コロサイ3:23)

奉仕は、主に仕え、主にささげるものです。喜んで、自分に与えられている時間・賜物・財産を主のためにささげ、用いましょう。

またキリストのからだを建て上げるために必要な奉仕ですから、できる限りそれを責任をもって果たすようにしましょう。時間と約束を守る

ことは大切です。

ゆだねられた務めは忠実に果たしたいものです。どうしてもできない場合は、早めに連絡するようにしましょう。

2．奉仕の種類

「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。」

（Ⅰペテロ4:10－11）

奉仕は、教会の必要にしたがって生まれるものですからいろいろな種類があります。

役員、執事、教会学校教師、集会の司会、奏楽、受付など人の目につきやすい奉仕から、陰で黙々となされる奉仕まで幅広いものです。

会計管理、施設管理、集会のための準備（掃除、プログラム）、接待、広報、他の人々の必要に応えること、訪問、通信、トラクト配布、どの一つ一つも教会として進んで行くために欠かすことのできない奉仕です。

神が、自分に与えてくださっているものを確認してどんな小さなことでも喜んで奉仕しましょう。

❼ 確認クイズ ❼

Q１．奉仕とは何ですか。

Q２．十分の一献金は、なぜささげるのでしょうか。

Q３．献金をささげるとき大切なことは何ですか。

Q４．どんな奉仕ができると思いますか。

Q５．この課の学びで教えられたこと、心に残ったことは何ですか？

第8課 あかしの生活

ほとんどのクリスチャンは、救われた後、すぐに天国に行くのではなく、なおしばらくの間、この世にとどまって生きることになります。それは、神がクリスチャンに、この世でなすべき使命を与えておられるからです。

そのクリスチャンに与えられた大切な使命の一つが、救い主イエス・キリストを証しすること、即ち、伝道です。

伝道は、クリスチャンだけに与えられている特別な使命であり、もし、クリスチャンが伝道しなかったら、他の人は、だれも救われずに滅んでしまいます。ですから、先に救われた私たちは、何としてもイエス・キリストの福音を一人でも多くの人に伝えたいと願います。

この課では、この大切な伝道の使命を果たすために、日々の生活の中でどのように生きればよいかを学びます。

●この課で学ぶ内容●

［1］伝道

［2］この世で生きる

［3］他宗教とのかかわり

［1］伝道

◆ ポイント ◆

1．クリスチャンの使命：伝道は、すべてのクリスチャンに与えられた神からの使命です。
2．伝道の内容：伝道は、主イエスの救いの恵みを証しし、救い主イエスを宣べ伝えることです。
3．伝道の方法：日々祈り、言葉と生活を通して、主イエスを証しします。
4．伝道の力：伝道は、聖霊なる神の力によって行われます。

1．クリスチャンの使命

よみがえられたイエス・キリストは、「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」（マルコ16:15）との大宣教命令を弟子達に与えられました。

伝道は、牧師や伝道者などの特別な人だけが行なう働きではなく、すべてのクリスチャンに与えられた神からの使命なのです。

パウロは、

> 私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならないことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわいに会います。（Ⅰコリント9:16）

と語り、神から与えられた伝道の使命を確信していました。

また、
19世紀に活躍した
スポルジョンは

クリスチャンの主な仕事は、
たましいを勝ち取ることである

と言って、キリストの福音を宣べ伝えました。

実際、多くのクリスチャンは、家族や友人から誘われて教会に行き、やがて信仰を持ち、クリスチャンになりました。

宣べ伝える人がいて、はじめて人々は福音を聞くことができます。(ローマ10:14、15)

私たちも福音を宣べ伝え、たましいを勝ち取る使命に生きるクリスチャンになりましょう。

2．伝道の内容

伝道において、私たちは何を伝えたらよいのでしょうか。経験したことのないことを証しせよと言われてもできません。

しかし、クリスチャンの証しとは、日々私たちが経験している神の救いの恵みを語ることなのです。ですから、神によって救われている人は、皆、救いの恵みを日々経験しているわけですから、だれでも主イエスの救いの恵みを証しすることができるのです。

イエス様は、救われたゲラサ人に対して、「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたにどんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。」と語られたとき、彼は、「イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかをデカポリスの地方で言い広め始めた」のです。(マルコ5:19、20)

私たちも自分に与えられた主の恵みとあわれみを証しする者となりましょう。また、さらに、個人伝道のために準備をし、訓練をうけて、聖書から、私たちを救うために十字架で死に、よみがえられた救い主イエス・キリストを伝えることに挑戦しましょう。

伝道とは、父なる神への唯一の道である救い主イエス・キリストを伝

えることです。

3．伝道の方法

では、具体的にどのようにしてイエス・キリストの福音を伝えることができるでしょうか。

まず第1に、祈ることです。

日々、福音を伝えたい人のためにとりなし、また、自分がよき証し人になることができるように祈る時、神は、私たちの祈りに応えて、証しの機会を備えてくださいます。

第2に、日頃から、自分はクリスチャンであることをまわりの人に知らせることです。そうすることによって、証しの機会が開かれてきます。

第3に、人々を教会に誘うことです。

礼拝、伝道集会、家庭集会等に、家族や友人を誘うことによって、福音を伝えることができます。

第4に、トラクト配布や伝道文書をプレゼントしたり、手紙を書いたりすることもできます。

そして第5に、私たちは主の証人として、個人的に自分の信仰の恵みを証ししたり、聖書からキリストの福音を伝える個人伝道をすることもできます。

私たちは皆、人々のたましいを勝ち取る個人伝道ができるクリスチャンとなることを目指しましょう。

また、

伝道において大切なことは、日頃の生活を通して、よき証しを立てておくことです。

伝道は、単なる口先のことばによるのではなく、その人の生活や人格の裏付けが求められます。

「こういうわけですから、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」

（Ⅰコリント10:31）

すべての生活を通して、キリストのかおりを放つあかしの生活を目指

しましょう。

4．伝道の力

伝道の使命が与えられていることはわかるが、私には伝道する勇気も能力も知恵もないと思う方もおられるかもしれません。

しかし、伝道は私たちの力によって行なうのではなく、聖霊なる神の力によって行われるのです。

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」（使徒1:8）

また、聖霊は私たちが語るべきことばをも教えてくださいます。

「人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。」（マタイ10:19）

ですから、伝道するときには、伝道の力は神が与えてくださることを信じ、神の助けを祈り、ゆだねて、救い主イエスを証ししましょう。

また、聖霊は、日頃から祈りとみことばによる備えをしている人に、十分な力を与えてくださることも確かです。

ですから、日頃から、必要なみことばをいつでも用いることができる準備をしておいて、主の助けと力を信じて、主イエスの証人として福音を伝えましょう。（Ⅰペテロ3:15）

［2］この世で生きる

◆ ポイント ◆

1．証しの機会：未信者との付き合いは、良き証しの機会となります。

2．誘惑に対する注意：自分の信仰を日頃から伝え、誘惑に対しては一線を引くことによって、自分を罪から守り、良き証しを立てることができます。

3．悪習慣について：酒、煙草を飲まないのが、クリスチャンの賢明な生き方です。

1．証しの機会

イエス・キリストは、「あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。」（ヨハネ17:18）と語られました。

私たちは、福音を伝えるという使命を神からいただいて、この世の人々の中に神によって遣わされています。

ですから、クリスチャンは、この世から隔離されて、クリスチャンだけの生活をするのではなく、積極的に、まだイエス・キリストの救いを知らない未信者の人々とも付き合って、証しの機会をつくることが大切です。

家族や友人、職場の同僚、地域社会の人々と良い関係を保ちながら、隣人を愛し、神の愛と赦しの福音を伝える機会としましょう。

2．誘惑に対する注意

次に、未信者の人々と付き合う際の注意点を考えてみましょう。

イエス・キリストは、「わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。」（ヨハネ17:16）と語られ、

クリスチャンは、この世に遣わされているが、この世のものではない

ことを教えられました。ここに、私たちが未信者の人々と付き合う際の派遣と分離の両面の姿勢を知ることができます。

未信者との付き合いは、良き証しの機会となりますが、他方、様々な罪に対する誘惑の機会も潜んでいるのです。未信者に伝道したいと願う余り、未信者と罪まで共有して、「ミイラ取りがミイラになる」ことがないように注意しなければなりません。

そのためには、まず、未信者に対して、自分の信仰の旗印を鮮明に掲げ、「私はクリスチャンです。」と日頃から伝えておくことが大切です。

次に、未信者とここまでは付き合うが、ここからは付き合わないという一線をはっきりと引いておくことです。

「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。」　（Ⅱコリント6:14）

このことが、はっきりしていないと、未信者との付き合いが、証しどころか、未信者をつまずかせ、自分もつまずく結果になってしまいます。

このことは、未信者との男女交際や結婚においても注意すべきことです。

未信者との男女交際が、証しをする目的で始まったのにもかかわらず、未信者との分離、一線を引くことを忘れてしまう結果、罪を犯す結果になることがあります。この点は、クリスチャン同士の男女交際においても十分気を付けるべきことであり、この世の価値観や風潮に流されないように注意しましょう。

また、結婚してから未信者の相手に伝道しよう、結婚したら相手もクリスチャンになってくれるだろう等と考えて妥協し、未信者と結婚して、結局は、伝道どころかクリスチャン自身も信仰をなくしてしまうこともあるのです。

未信者が救われてから結婚する、救われないなら結婚しない、「私はクリスチャンと結婚し、クリスチャンホームを築く」との信仰の姿勢をつらぬき、結婚のために祈りましょう。

3．悪習慣について

聖書は、クリスチャンは、生活のすべてを通して、神の栄光を現わすように教えています。

「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」

（Ｉコリント10:31）

クリスチャンにとっては、生活の様々な悪習慣を断ち切ることが、神の栄光を現わすことになり、また、未信者の人々への証しとなります。

(1) お酒について

まず、酒に対してどのような態度を取るべきでしょうか。

日本においては、未信者との付き合いにおいて必ずと言っていいほど、酒がつきものです。酒については、聖書には、酒は飲むなとは書いてありませんが、クリスチャンは次の理由で酒を飲まないのが賢明です。

まず、酒には人を罪に誘惑する大きな力があります。

聖書は、「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。」（エペソ5:18）と教えています。酒を飲み酔うとき、通常の理性が失われ、酒の力に支配されて、思わぬ誘惑に陥ってしまう危険があります。

酒には、習慣性や中毒性もあります。酒を飲む人は、私は大丈夫、私は酔わない、酔っていないと言いますが、自分の力を過信すると思わぬ落とし穴に落ちてしまいます。

また、一方で、クリスチャンがアルコール中毒の人を助けようとしているのに、他方で、クリスチャンが酒を飲んでいては、証しになりません。

さらに、クリスチャンは、自分の体を聖霊の宮として大切にし、健康を害することは避けるべきです。（Ｉコリント6:19、20）

あるクリスチャンは、会社の営業のトップになった時、主に頼り、酒の付き合いはせず、信仰の旗印を掲げて仕事をし、結果的に売り上げも向上させることができました。確かに、この点では信仰の闘いがあります。

しかし、御霊に満たされ、御霊に支配される時、神が弱い私たちを必

ず助けてくださいます。

(2) たばこについて

たばこについてはどうでしょうか。

煙草は、体に害であり、聖霊の宮である私たちの体を害することは、ふさわしくありません。たばこにも習慣性、中毒性があります。また喫煙は回りの人にも害を与え、良きあかしとなりません。

酒と同様、クリスチャンは、たばこを吸わないのが賢明です。

酒やたばこは、救いにかかわる中心的なことではありませんが、小さなことをやめられない意志の弱さが、大きな信仰的決断を迫られる時に、足を引っ張る原因となることがあります。

もし、今、酒やたばこがやめられないなら、とにかく神に祈って、止めたいという意志を持って、止める努力をしましょう。その他、薬物やギャンブル等の悪習慣もあります。中毒の人は、積極的に医療的な助けを求めましょう。

[3] 他宗教とのかかわり

◆ ポイント ◆

1．偶像礼拝を避ける：
偶像礼拝を避けることが、他宗教とのかかわりの中でのクリスチャンの根本的信仰姿勢です。

2．仏式葬儀に出席する際の心得：
仏式葬儀においても、死者礼拝を避ける注意が必要です。

3．その他の宗教行事や宗教的習慣について：
私たちのすべての生活を通して、主こそまことの生ける神であることを証ししましょう。

1．偶像礼拝を避ける

十戒の第２戒に「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。…それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。…。」（出エジプト20:4－6）とあります。

まことの神を拝まず、偶像を拝むことは、最も大きな罪です。クリスチャンは、そのことを知り、罪を悔い改めて、まことの神に立ち返りました。

ところが、日本では、仏教や神道が社会に根づき、日常生活の中に、様々な宗教行事や宗教的習慣が入り込んでいます。多くの日本人にとっては、先祖を拝むことも、神社にお参りに行くことも罪とは考えません。

そのため、クリスチャンとして、この国の中で唯一神への信仰を貫くことには、大きな闘いがあります。家庭、職場、地域の中で、宗教行事に参加するようにとの圧力もあります。このような中で、神に従い、良き証しを立てるためにも、偶像礼拝を避けるという根本的信仰姿勢を貫くことが大切です。

主は、十戒の第２戒の後半で「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで、施すからである。」（出エジプト20:6）と、偶像礼拝をしない者に対する祝福を約束しておられます。

ですから、「人に従うより、神に従うべきです。」（使徒5:29）との信仰に立ち、どのような場にあっても、人の顔色を恐れず、神を恐れ、神の助けをいただいて、人前でも堂々とまことの神だけを拝む一貫した信仰姿勢を保ちましょう。

2．仏式葬儀に出席する際の心得

今日、日本では、葬儀はほとんどが仏式で行われます。

クリスチャンが、仏式葬儀に出席する場合、どのようなことに注意すればよいでしょうか。

仏式、或いは他の宗教の場合もそうですが、まず、偶像礼拝を避ける注意が必要です。

日本の仏教は、先祖崇拝と一つとなり、死者を仏として拝み、供養し

ます。ですから、私たちは、死者を礼拝しないようにしなければいけません。

具体的には、焼香など、死者に対する供養、礼拝行為は勇気がいりますが、避けるべきです。

一例として、黙祷して遺族の慰めを祈る等をして、クリスチャンとして、哀悼の気持ちを表すようにします。

また、弔辞用袋は、死者に供えるものではありませんので「ご霊前」ではなく、「お花料」と書いたものを用いましょう。

また、葬儀の手伝いをする必要がある場合は、宗教色のない仕事をするようにしましょう。わからないことがあれば、牧師に聞いて、助言を得ましょう。

3．その他の宗教行事や宗教的習慣について

法事や、お盆、墓参り等も基本的には同じで、出席する場合は、偶像礼拝を避け、焼香は辞退し、先祖を拝まないようにすることです。このような集まりは、親族の交わりの機会ともなり、クリスチャンの証しの機会ともなります。

その他、日本では、習慣化した様々な行事の中に宗教色があります。

私たちは、ただ、習慣に従うのではなく、様々な日本の行事の意味を知り、クリスチャンとしてどのように接していけば良いかを学ぶことが大切です。

占い、お守り等も偶像礼拝になりますのでしないようにしましょう。

また、仏壇、神棚、或いは氏子等の問題についても、分からない点は牧師から助言を得て解決しましょう。そして、私たちの生活のすべてを通して、主こそ生けるまことの神であることを証ししましょう。

祈り

天の父なる神。どうか私が、イエス・キリストの福音を宣べ伝え、たましいを勝ち取るクリスチャンとなることができるようにしてください。

また、あらゆる誘惑から私を守り、信仰の闘いにおいて妥協せず、神に従い、良き証しの生活をすることができるようにしてください。

主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

◆8 確認クイズ ◆8

Q１．伝道をするために、日頃からどのような生活と備えをすべきでしょうか。

Q２．未信者との付き合いにおいて、注意すべきことは何ですか。

Q３．他宗教とのかかわりにおいて、特に注意すべき点は何ですか。

Q４．この課で教えられたこと、心に残ったことは何ですか。

第9課

教会の純潔と一致

教会は、キリストの花嫁として、花婿キリストの前に純潔を保つことが求められています。そのために教会は、罪から守られ、聖さを保たなければなりません。

「あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なるものとされなさい。それは、『わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。』と書いてあるからです。」（Ⅰペテロ1:15,16）

もし、教会が聖さを失うなら、この世にあって、神の栄光を現わす教会の使命を果たすことはできません。教会の純潔とは、教会の聖さのことです。

また、教会が保つべきもう一つの大切な性質に、一致があります。「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」（ガラテヤ3:28）

教会は、教会に連なるすべてのクリスチャンが一つになることができる交わりです。一致のある教会は、力を結集して、教会の使命を果たすことができます。

しかし、この世にあって、教会の純潔と一致を保つためには、闘いがあり、クリスチャン一人一人の努力も必要です。この課では、教会の純潔と一致を保つために、私たちに必要なことを学びます。

●この課で学ぶ内容●

［1］教会の純潔

［2］教会の一致

［1］教会の純潔

◆ ポイント ◆

1．教会の純潔とは：
教会の聖さのことであり、みことばに根ざした信仰と聖い生活と戒規によって、教会の純潔は保たれます。
2．真理のみことばに根ざした信仰：
教会は、真理のみことばに対する信仰を保つことによって、聖さを保つことができます。
3．聖い生活：
聖別された者としてふさわしく、日々悔い改め、聖い生活を目指して信仰生活を歩みましょう。
4．戒規：
戒規は、罪の中にある人を悔い改めに導くために、また、教会を罪から守り、聖さを保つために行われます。

1．教会の純潔とは

教会はキリストの花嫁として、やがて再臨の日に、花婿キリストとお会いし、婚姻の時を迎えるまで、自らを聖く保たなければなりません。

教会の純潔とは、教会の聖さのことです。

では、教会はどのようにして自らを聖く保つことができるでしょうか。

具体的には、真理のみことばに根ざした信仰と聖い生活と戒規によって、教会は聖さを保つことができます。

2．真理のみことばに根ざした信仰

教会の聖さが損なわれる原因の一つに、真理のみことばに対する信仰の欠如や否定があります。聖さとは、特別な目的のために他のものから分けられる、聖別されるという意味があります。

イエス・キリストは、「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」（ヨハネ17:17）と、弟子たち、そして教会のために祈られました。

教会は、真理のみことばによって、キリストに贖われ、特別な神の使命のために、この世から聖別されました。そして、真理のみことばに根ざした信仰によって、聖さを保つことができます。

聖書の時代には、みことばの真理を否定し、誤った教えをする異端が出てきました。また、律法主義という一見、本物と見分けが付きにくい誤った教えも出てきました。今日も、多くの異端があり、また、聖書を誤りない神のことばとは認めない自由主義神学や、人間中心のヒューマニズムや世俗主義などがあり、教会の信仰を脅かす危険性があります。ですから、教会は、絶えずみことばの真理にしっかりと立ち、誤った教えが入り込んで、主に対する信仰を失わないように、見張らなければなりません。

そのためには、私たち自身が、よくみことばを読み、学んで、正しい信仰を養うことが大切です。

本物を知っている人には、偽物を見分ける力があります。

3．聖い生活

真理のみことばに根ざした信仰は、クリスチャンの生活の中に具体的に現わされます。私たちは、信仰と生活の一致を求め、主に喜ばれる聖い生活を目標とすることが大切です。とはいえ、私たちは、救われた罪人であり、神の恵みによって、日々聖化の恵みにあずかってはいますが、この世にあっては罪を犯しやすい者です。

罪を犯したとき、私たちはすぐに悔い改めて、キリストの赦しを確認しましょう。

「もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ1:9）

クリスチャンが罪を犯したまま、悔い改めないと、救われてはいても、

神との親しい交わりを持つことができません。ですから、失敗をした時には、すぐに悔い改めて、罪の赦しときよめをキリストからいただき、聖別された者としてふさわしい聖い生活を目指しましょう。

4．戒規

主イエスは、「もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行ってふたりだけのところで責めなさい。もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。……それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。」（マタイ18:15－17）と語られました。

教会の中に罪が入り込んで来ると、教会は神の祝福を失ってしまいます。教会を罪から守り、聖さを保つために、教会には戒規があります。

戒規とは、教会員が重大な罪を犯した場合、その人を戒め、正し、悔い改めに導くために行われる処置です。

戒規の根拠は聖書にあり、教会はこれを重んじています。

真の教会の持つ３つの印として、

(1) 純粋な教理の説教、

(2) 聖礼典の執行、

(3) 戒規の執行が伝統的に挙げられています。

戒規の目的は、

- **まず、罪の中にある人が、悔い改めて、神と教会の交わりを回復することであり、**
- **次に、教会を罪から守り、教会の聖さ、一致、平和を保つことです。**

戒規の執行は、教会に神への恐れを生じさせ、教会内に浄化作用が与えられ、教会の聖さが保たれます。他方、教会が罪をないがしろにし、戒規の執行をおこたると、教会の聖さが損なわれ、力がなくなり、神の祝福を失います。

具体的に同盟教団の規則の中では、戒規には、信徒の場合、戒告、陪餐停止、除名があり、また、教職の場合は、戒告、停職、免職があります。

私たちは、戒規の執行となるような罪を犯さないように、聖潔に向か

って歩みたいと思います。と同時に、もし、教会に罪が入り込むならば、戒規を重んじ、教会の純潔を守り、罪の中にある人の回復を願うべきです。

［2］教会の一致

◆ ポイント ◆

1．多様性と一致：
教会は、キリストのからだとして、多様性の中に一致があります。
2．一致の土台：
教会の一致の土台は、主イエスに対する信仰とみことばにあります。
3．教団、教派の協力：
教団、教派の協力も、信仰の一致がその土台となります。

1．多様性と一致

聖書は、教会をキリストのからだとして、また、クリスチャンをキリストのからだの各器官として教えています。

「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。」（Ｉコリント12:27）

からだの各器官は、それぞれ違った形をし、違った働きをします。しかし、多くの器官がそれぞれ結び合わされ、組み合わされて、一つのからだとして調和を保っています。どの器官も必要のないものはありません。からだには、それぞれの器官の多様性と一つのからだとしての一致があります。

教会においても、それぞれのクリスチャンは、性格、能力も、才能も、賜物も皆違います。クリスチャンになったら、皆同じにならなければい

けないのではありません。

教会には、教会員の多様性があります。ひとりひとりが、異なった賜物を生かして、主と教会のために用いることが期待されています。

他方、教会は一つのキリストのからだとしての一致と調和があります。

教会員はそれぞれ違いますが、かしらなるキリストにあって、一つにつながり、お互いに助け合って、キリストのからだなる教会を形成していくのです。

2．一致の土台

教会の中で、意見が違うような場合、私たちはどこに一致点を見出せばよいのでしょうか。教会の一致の土台は、何でしょうか。それは、救い主イエス・キリストに対する信仰です。

「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。」

（エペソ4:5）

具体的には、イエス・キリストを証しする真理のみことば、聖書を信じる信仰です。

「あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、
キリスト・イエスご自身がその礎石です。」　（エペソ2:20）

たとえ、意見が違っても、主を見上げて祈り、みことばに聞き、主のみこころがなることを求めていくときに、主にあって一致することができます。そして、主にある平和を持って、伝道と教会形成に励むことができます。

また、同盟教団の教憲・教規と各教会の教会規則は、教会運営における一致の基礎となります。

そこには、一致のもとである信仰告白と教会運営に関する具体的規定が記されています。教会運営のための規則は、聖書のように絶対的なものではありませんが、教会を運営していくために教会員皆が守るルールです。交通ルールを守ると、安全なように、教会規則を守ることによって、教会は一致して、この世に向かってその使命を果たすことができます。

3．教団、教派の協力

歴史的、地理的、文化的、信仰的な理由からたくさんの教派がありますが、同じ聖書信仰に立っている教団、教派、教会とは、多様性の中にも、信仰の一致をもって協力して働くことができます。

現に、福音派の教会協力は、盛んに行われています。私たちの同盟教団は、もともと聖書信仰に立つ超教派の宣教団体によって始まりましたので、教団のルーツの中に、諸教会との宣教協力があり、これは今も同盟教団の特徴の一つです。

それに対して、エキュメニカル運動（教会一致運動）は、信仰の一致を土台とした教会の一致を大切にせず、むしろ、組織的な一致や社会運動における一致等を大切にしています。主に、自由主義神学の立場にある教会やカトリック教会が積極的に行なっています。教会内においても、教派間においても、信仰の一致のあるところに、本当の一致が成り立ちます。

祈　り

天の父なる神。私が教会の純潔と一致のために、教会員としての責任を果たすことができるように助けてください。

また、みことばに養われ、正しい信仰の上に、聖い生活を築くことができるようにしてください。

イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

⑨ 確認クイズ ⑨

Q１．教会の純潔とは何のことですか。また、教会の純潔を守るためには何が必要ですか。

Q２．教会の一致の土台は何ですか。

Q３．この課で教えられたこと、心に残ったことは何ですか。

第10課 洗礼(バプテスマ)に備えよう

いよいよ、このテキストも最後の課となりました。この課では、洗礼(バプテスマ)式への具体的な準備について考えたいと思います。

●この課で学ぶ内容●

［1］洗礼を受ける時期と手続き

［2］洗礼式での救いのあかしの備え

［1］洗礼を受ける時期と手続き

それぞれの教会によって、洗礼についての指導の仕方はちがうと思いますので、ここでは原則的なことだけを説明しましょう。

1．洗礼を受ける時期

原則的には、信仰の出発としての洗礼(バプテスマ)は、信仰を持った後に、できるだけ早く受けることが望ましいと言えます。

特に、未成年者の場合は、両親とよく相談することが必要だと思います。また、夫婦の一方が、まだイエス様を信じていない場合も、夫婦でよく話し合うことが必要だと思います。ぞれぞれの家庭の事情があると思いますから、牧師とよく相談して、その指導に従って下さい。

2．洗礼を受ける手続き

各教会によって進め方が違いますが、ここでは、その一つの例を紹介します。

(1) 洗礼を希望することを申し出る

教会の牧師に洗礼を受けたい旨を申し出てください。洗礼(バプテスマ)志願書に記入し、それを提出します。

(2) 洗礼準備会

クリスチャンとして、また教会の一員として、ふさわしい歩みができるように、何回か洗礼準備会（救いの確認と教会生活の基礎の学び—このテキストはそのクラスのためのもの—）が持たれます。

(3) 洗礼試問会

洗礼準備会を終了した後に、教会役員会による面接（洗礼試問会）があります。そして、教会役員会の承認のもとに、定められた日時に洗礼式が行なわれます。

(4) 洗礼式を行なう時

洗礼式は、原則として主の日の礼拝の中で行なわれます。教会の特別の記念日（クリスマス、イースター、ペンテコステなど）の礼拝の中で行なわれることもあります。

3．洗礼式当日までの準備

いよいよ洗礼を受けることが決まったら、以下のことを覚えて、よい準備を持って洗礼式にのぞみましょう。

(1) 当日までの備え

①祈りをもって備えましょう。

②体調を整えましょう

・当日、体調を崩さないように注意しましょう。

・当日体調が悪い場合は牧師や牧師夫人と相談しましょう。

(2) 当日用意するもの

洗礼には、浸礼(体を水の中に沈める)方式と、滴礼(頭にしずくをかける)の二つの方式があります。

浸礼の場合は、全身が水に浸され、濡れますので、そのための種々の準備が必要になります。洗礼着(牧師にお尋ね下さい)、タオル、着替えなど。

詳しくは、教会の牧師にお尋ね下さい。

(3) 当日のプログラム

ここでは一つの例として、教団の式文のプログラムを紹介します。

①讃美歌　②式辞　③聖書　④祈祷　⑤誓約

⑥授洗　⑦祈祷　⑧讃美歌　⑨祝祷

(4) 受洗後

①洗礼式の記録としてのあかし文書や写真の記録、バプテスマ証明書などは、生涯の良い記念となります。

②洗礼を受けた恵みのしるしとして、感謝献金をしましょう。

[2] 洗礼式での救いのあかしの備え

洗礼式では、一般的に、洗礼を受ける方に、自分の救いのあかしをしていただいています。

ここでは、原稿用紙3枚位（読むと約3～4分）で、簡単に自分の救

いのあかしを書く練習をしたいと思います。

救いのあかしを書くに当たって、以下のポイントを入れて書くと、どんな時でも、自分がどのようにイエス・キリストを信じたかを分かりやすく、相手の人に伝えることができると思います。（Ⅰペテロ3:15）

◆ あかしのポイント ◆

1．イエス様を信じる前の自分
・どんな問題があったか？
・どんなことで悩んでいたか？
・どんなことを求めていたか？など。

何か一つ、イエス様を信じるようになった理由や問題などをあげてみましょう。

2．どのようにイエス様を信じたか？
・いつ、どんなきっかけで聖書を読むようになったか？
・どうして教会に来るようになったか？
・どうして、イエス様を信じる決心をしたか？

3．イエス様を信じてから、自分の生活がどのように変わったか？

4．あなたの救いの確信のみことばは何か？

特に、イエス様を信じてから自分がどのように変えられたかという、「積極面」に比重を置くようにして、あかしを書いてみましょう。

☆救いのあかしの実例

先ず、ポイントを書き出してみましょう。(ここでは、一人の人のあかしの原稿を参考に説明します。)

以下のポイントに箇条書きで答えていきましょう。

(1) 信じる前の自分について(どんな問題がありましたか?どんなことで悩んでいましたか?)

・自分に悪いことをした人をゆるせなかった。
・本当の自分をすなおに出すことができなかった。

(2) どのように救い主を信じたのか(いつ? どこで? どんなきっかけで? どうして?)

・1975年夏(いつ?)
・高校生のためのキリスト教のキャンプで。(どこで?)
・高校の友人に誘われて。(どんなきっかけで?)
・キリストの十字架の意味を聞き、自分の問題を解決してほしいと願って信じた。(どうして?)

(3) キリストを信じた後の自分について(自分の人生がどのように変えられてきましたか?)

・聖書から、自分を傷つけた人を憎むという罪を指摘された。
・神が自分のことをゆるされたことを感謝して、その人をゆるすことができた。

(4) キリストを信じて救われたことを確信できる聖句は何ですか?

・Ⅱコリント5:17

このように、ポイントを書き出してから、それをまとめて文章にしていきます。

次の文章は、上のポイントをもとに書かれたあかしです。

―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―

救いのあかし　○○　△△子

（信じる前の自分）

小さいころから「いい子」という評価の中で生きてきた私は、中学2年の頃から、だれに対しても本当の自分を出せないことを悩み始めました。

中学3年のとき仲の良かった友人から、生まれて初めて私の性格を批判され、それが元で、その人と卒業まで絶交してしまいました。その後も、私は彼女に傷つけられたことで、彼女を憎み続けたのです。

（どのように救い主を信じたのか）

都立高校に入学したとき、同じクラスに、クリスチャンがいました。私は彼女と親しくなり、やがて彼女に助けられながら、自分で聖書を読むようになりました。

そして、その年の夏休みに、その人に誘われ、一週間のキャンプに参加しました。一週間、毎日、朝と夜に聖書のお話がありました。

3日目の晩に、一人の人が、どうしてキリストを信じるようになったのかという話をして、その後に宣教師の先生から、イエス・キリストが十字架にかけられた意味についての話がありました。それは、すべての人が神がいるのに神を無視して自分勝手に生きていること。それが、聖書の言っている罪であり、すべての人の罪のために、キリストが十字架で身代わりの罰を受けてくださったのだということでした。そして、キリストは三日目によみがえったので、このキリストを信じるときに、すべての罪がゆるされて永遠のいのちをいただけるという内容でした。

話を聞いているうちに、友人を憎み続けていることや、自分の性格で

悩んでいたことなどが思い出され、何も解決しないでいることに気づきました。そして、今聞いているイエス・キリストというお方がこのことを解決してくれるのかも知れないと思い、先生から「今日イエス・キリストを信じれば、あなたの罪はすべてゆるされます。今日信じる人は、手を上げてください。」と言われたとき、イエス様が助けてくださるのに賭けてみようと思い、思い切って手を上げました。

（キリストを信じた後の自分について）

その後、私の心の中に、中学時代の友人を憎む心が解決していないという問題が浮き彫りになりました。信仰を持ってから３か月間、聖書を読むたびに「その怒りを捨てて、相手をゆるしなさい。」と迫られました。

私は、ゆるせないと毎日反発し続けましたが、あるとき新約聖書エペソ人への手紙4:32のことばを読んで、神に自分がゆるされた者であることが分かり、憎んでいた相手をゆるしますと祈ることができました。その後、大変気持ちが楽になり、中学時代の友人に手紙を書いて、あやまることができたのです。

この体験は、私にイエス・キリストを信じたことが間違いではなかったことを、強烈に刻み付けるものとなりました。

（キリストを信じて救われたことを確信できる聖句は何ですか？）

新約聖書コリント人への手紙第二５章17節「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

では、あなたもチャレンジしてみましょう！

救いのあかしのポイントを書いてみよう！

例と同じように、以下の質問に答えながら、自分の救いのあかしのポイントを書き出してみましょう。（箇条書きで書いてみましょう。その後、原稿用紙にまとめてみましょう。）

1．信じる前の自分について（どんな問題がありましたか？ どんなことで悩んでいましたか？）

2．どのように救い主を信じたのか

・いつ？

・どこで？

・どんなきっかけで？

・どうして？

3．キリストを信じた後の自分について（自分の人生がどのように変えられてきましたか？）

4．キリストを信じて救われたことを確信できる聖句は何ですか？

☆上のポイントをもとに、原稿用紙３枚くらいにまとめてみましょう。

洗礼式は、一生に一度の大切な時です。また、イエス様の弟子として、本格的にキリストに従う生涯をスタートする時です。良い準備をして、良いスタートを切って行きましょう。

確認クイズの答え

◆第１課◆

Ｑ１．罪の根本とは何ですか。あなたは神の前で自分が罪人であることを認めますか。

Ａ．　罪の根本は、まことの神に無関心あるいは反抗的で、礼拝もせず感謝もしないことです。

Ｑ２．神がキリスト・イエスにあって私たちにくださる祝福を三つ述べて下さい。

Ａ．　神が下さる祝福は、

義認

聖化

神の子とすることです。

Ｑ３．あなたがイエス・キリストの義を受け取る方法は何ですか。

Ａ．信仰によって受け取ります。

Ｑ４．あなたがイエス・キリストを救い主として信じたとき、あなたを義と認めるのは、誰ですか？

Ａ．神です。

Ｑ５．キリストを信じたとき、私は（　罪　）という主人に対して死んだので、（　罪　）から解放され、義の奴隷となりました。

◆第 2 課◆

Q 1．キリストを信じたとき、私は（ 罪 ）という主人に対して死んだので、（ 罪 ）から解放され、義の奴隷となりました。「1」-(1)-1.

Q 2．キリストを信じたとき、私は律法に対して死んだので、（ 律法 ）の奴隷状態からも解放され、（ 御霊 ）によって自発的に神の御心を行ないます。

Q 3．キリスト者が罪を犯してしまったときは、どうすればよいですか。
A．罪を告白し、もう一度キリストにある罪の赦しの約束を確信する。

Q 4．私が奴隷のようにビクビクと神を恐れるのでなく、喜んで神にお仕えするために、神は私に（ 子 ）とする御霊を与えてくださいました。

Q 5．私が神の子どもとされたということは、私は神を父とし御子を長子とする（ 神の家族 ）の一員になったということです。

◆第 3 課◆

Q 1．教会とは、どんなところですか？
教会は、
呼び集められた群れ（エクレシア）
神の民
キリストの体
です。

Q 2．教会の働きには、どんなことがありますか？
教会の使命（働き）は、

礼拝
福音宣教
信仰教育
交わり
奉仕
にまとめることができます。

◆第４課◆

Ｑ１．洗礼には、どんな意味がありますか？
Ａ．　洗礼(バプテスマ)式は、
キリストの命令に従う時
キリストの救いを確認する時
キリストの教会への入会の時
キリストのために生きることを決心する時
です。

Ｑ２．洗礼式の誓約は、どんなものですか。
Ａ．　洗礼式の誓約には、
１．唯一のまことの神への信仰を告白します
２．救い主、主イエス・キリストへの信仰を告白します
３．教会生活についての約束をします
という３つの部分があります。

◆第５課◆

Ｑ１．神との交わりは、どうして大切なのですか？
Ａ．　私たちは、いのちの源である神を離れては、何もすることができないから。
神との交わりを持つ時に、私たちは、豊かな実を結ぶことがで

きるから。

Q２．みことばと祈りには、どんな関係がありますか？

A．　神は、聖書のみことばによって、私たちに語りかけて下さいます。

私たちは、祈りを通して神に応答します

そして、さらにみことばと祈りによって、神と私たちの交わりが続けられ、深められて行きます。

私たちは、「みことば」と「祈り」という、２つの方法を通して、神との生きた交わりを体験することができます。

Q３．神との交わりの祝福はどんなものですか？

A．　神との交わりの祝福は、

主イエスとの新鮮な出会い

主イエスを知る

主イエスとともに歩み始める

主イエスに似た者に変えられる

ことです。

◆第６課◆

Q１．神を第一とする生活とは、具体的にどのようなことですか？

A．　神を第一とする生活とは、生活のすべてのことにおいて、神を第一として、神の喜ばれることを選んでゆくこと。

一週間の生活を神を礼拝する主の日を中心にして組み立てること。

Q２．なぜ日曜日が礼拝の日になったのですか？

A．　イエス様が金曜日に十字架に死なれ、日曜日に復活されたことに始まります。

初めイエス様ご自身が日曜日毎に、復活されたお姿を集まっている弟子たちに現されました。その後、聖霊に導かれた初代教会は主の復活の日を記念として、日曜日を礼拝の日として定め、今日に至っています。

Q３．礼拝には、二つの面がありますが、それは何と何ですか？

A．１．神から人に語りかけられる面

礼拝のメッセージに期待し、神の恵みを求めて集います。

２．私たちから神に献げる面

一週間の守りと祝福を覚えて、心からの感謝と賛美、また自分自身の全てをお献げする献身の時という面があります。

Q４．礼拝の心得には、具体的にどんなことがありますか？

A．一回一回の礼拝を大切にすること。

礼拝を休まないですむようにスケジュールを工夫すること。

遅刻早退をしないように気をつけること。

礼拝を休む時には、必ず教会に連絡すること。

子供はＣＳと礼拝と両方に出席すること。

◆第７課◆

Q１．奉仕とは何ですか。

A．神から与えられている賜物を、キリストのからだを建て上げるために用いること。

Q２．十分の一献金は、なぜささげるのでしょうか。

A．私たちのものは、神のものなので、神にお返しするため。

神に献げるときに、神が私たちを豊かに祝福してくださるため。

Q３．献金をささげるとき大切なことは何ですか。

Ａ．　神への感謝と服従の思いを込めて、心で決めたとおり、喜んで献げる。

◆第８課◆

Q１．伝道をするために、日頃からどのような生活と備えをすべきでしょうか。

Ａ．　日々、伝道のために祈り、日頃から自分がクリスチャンであることを知らせてくこと。

機会を見つけて、教会に誘うこと。

救いの証しや個人伝道ができるように、日頃から学び備えておくこと。

日常生活を通して良き証しを立てること。

Q２．未信者との付き合いにおいて、注意すべきことは何ですか。

Ａ．　未信者との付き合いは、良き証しの機会となると共に、様々な罪に対する誘惑の機会も潜んでいることを覚えておくことが、まず必要。

その上で、自分の信仰を日頃から伝え、誘惑に対しては一線を引くことによって、自分を罪から守り、良き証しを立てていくこと。

Q３．他宗教とのかかわりにおいて、特に注意すべき点は何ですか。

Ａ．　偶像礼拝を避け、まことの神だけを礼拝するクリスチャンの根本的な信仰姿勢を保つこと。

◆第９課◆

Q１．　教会の純潔とは何のことですか。また、教会の純潔を守るため

には何が必要ですか。

A．　教会の純潔とは、教会の聖さのこと。
教会の純潔を守るためには、
・真理のみことばに根ざした信仰と聖い生活が必要。
・罪を犯した時は、すぐに悔い改めてキリストの赦しを確認することが大切。
・教会の中に罪が入ってきた時には、戒規を執行して、罪を犯した人を戒め、悔い改めに導くと共に、教会を罪から守ることが大切。

Q２．教会の一致の土台は何ですか。

A．教会の一致の土台は、
主イエスに対する信仰であり、具体的には、聖書を信じる信仰。
教会の規則も教会運営における一致の基礎となる。
聖書信仰と言う共通の土台がある時、教会は多様性の中にも、一致を見出すことができる。

日本同盟基督教団信仰告白

旧、新約聖書66巻は、すべて神の霊感によって記された誤りのない神のことばであって、救い主イエス・キリストを顕(あら)わし、救いの道を教え、信仰と生活の唯一絶対の規範である。

神は霊であって、唯一全能の主である。神は永遠に父と子と聖霊の三位一体であって、その本質において同一であり、力と栄光とを等しくする。

父なる神は、永遠のみ旨により万物を創造し、その造られたものの絶対主権者であられる。

はじめに人は、神のかたちに創造され、神と正しい関係にあった。しかしサタンに誘惑され、神の意志に反逆して罪を犯し、神のかたちを毀(き)損(そん)した。それゆえ、すべての人は、罪と悲惨のもとに生まれ、その思いと言葉と行為とにおいて罪ある者である。自分の努力によっては、神に帰ることも、また、そのみ旨に適う善行を行なうこともできず、永遠の滅びに至る。

主イエス・キリストは、父なる神のひとり子であって、聖霊により宿り、処女マリヤより生まれた。真の神にして真の人である。主は我らの罪を贖(あがな)うために十字架にかかって死に、葬られ、三日目に甦(よみがえ)り、永遠の生命の保証を与えられた。主は大祭司として父なる神の右に座し、我らのために執り成したもう。

聖霊は、恵みによって、我らに、父と子を示し、罪を認めさせ、赦しを与え、我らを新たに生まれさせ、神の子となしたもう。人が義とされるのは、自分の行為によるのではない。主イエス・キリストが身代わりに死んでくださったゆえに、彼を信じるただその信仰によるのである。さらに、聖霊は、信じる我らの中に住み、我らを聖化し、我らにみ旨を行なわしめ、助け主、慰め主として世の終わりまでともにあり、我らをキリストの共同の相続人となしたもう。

教会は、聖霊によって召し出されたキリストの体であって、キリスト

はそのかしらである。贖われた者はみなその肢体である。地上の教会は、再び来たりたもう主を待ち望みつつ、聖書の真理に立ち、礼拝を守り、聖礼典を執行し、戒規を重んじ、すべての造られたものに福音を宣べ伝える。

終わりの時に、主イエス・キリストは、みからだをもって再臨し、生ける者、死せる者を審判したもう。主は、すべてのものを新たにし、み国を父なる神に渡したもう。

あとがき

この本は、「聖書が教えている基本的なこと」、「聖書が教えている教会生活」という「聖書が教えている」シリーズ二部作の後編として出版しました。

この本が諸教会で用いられ、教会生活の基礎をしっかりと学び、洗礼(バプテスマ)を受け、キリストの弟子として神の栄光を現わすクリスチャンがたくさん育つように願っております。

なお、この本の第10課「洗礼(バプテスマ)に備えよう」の「洗礼を受ける時期と手続き」は、すでに日本同盟基督教団が出版している「バプテスマの備え」の内容をもとに作成しました。

この本の追加情報を日本同盟基督教団のホームページで公開しておりますので、どうぞご利用下さい。(日本同盟基督教団 “http://www.domei.info/”)

最後に、推薦のことばをお書きくださった赤江弘之先生、表紙絵を描いてくださった池上王士兄弟、本文イラストを描いてくださった林静香姉妹、出版についてお世話くださった株式会社いなもと印刷の稲本義則兄弟、また、本文への聖句の引用を許可してくださった、日本聖書刊行会（承認番号聖第593号）に感謝申し上げます。

2000年11月

日本同盟基督教団教育部長　林　俊宏

執筆者紹介

第１・２課 救いの確信と成長（その１、２）
……水草　修治（小海キリスト教会牧師）

第３課 教会　……金　　煥（足立愛の教会牧師）

第４課 洗礼(バプテスマ)について

第５課 神との交わり　……林　　俊宏（朝霞聖書教会牧師）

第６課 礼拝を目的とする人生
……増山　　毅（静岡めぐみ教会牧師）

第７課 教会員の務め　……丸山　園子（京都めぐみ教会牧師）

第８課 あかしの生活

第９課 教会の純潔と一致……石原　伸光（波崎キリスト教会牧師）

第10課 洗礼(バプテスマ)に備えよう
……林　　俊宏（朝霞聖書教会牧師）

聖書が教えている教会生活
— 教会生活入門のてびき —

発行日　2000年11月1日
　5刷　2014年4月1日

発行者　安藤能成

発行所　日本同盟基督教団事務所
〒151-0072
東京都渋谷区幡ヶ谷1-23-14
TEL 03-3465-2194㈹
FAX 03-5465-5465
E-mail: office@domei.info

編集者　日本同盟基督教団・教会教育部

印刷・製本　株式会社いなもと印刷
〒300-0007
茨城県土浦市板谷6-28-8
TEL 029-826-1221

落丁乱丁はお取り替えします

ISBN978-4-9902855-2-4
C0016 ¥850E

定価　本体850円（税別）

聖書が教えている教会生活

教会生活入門のてびき